

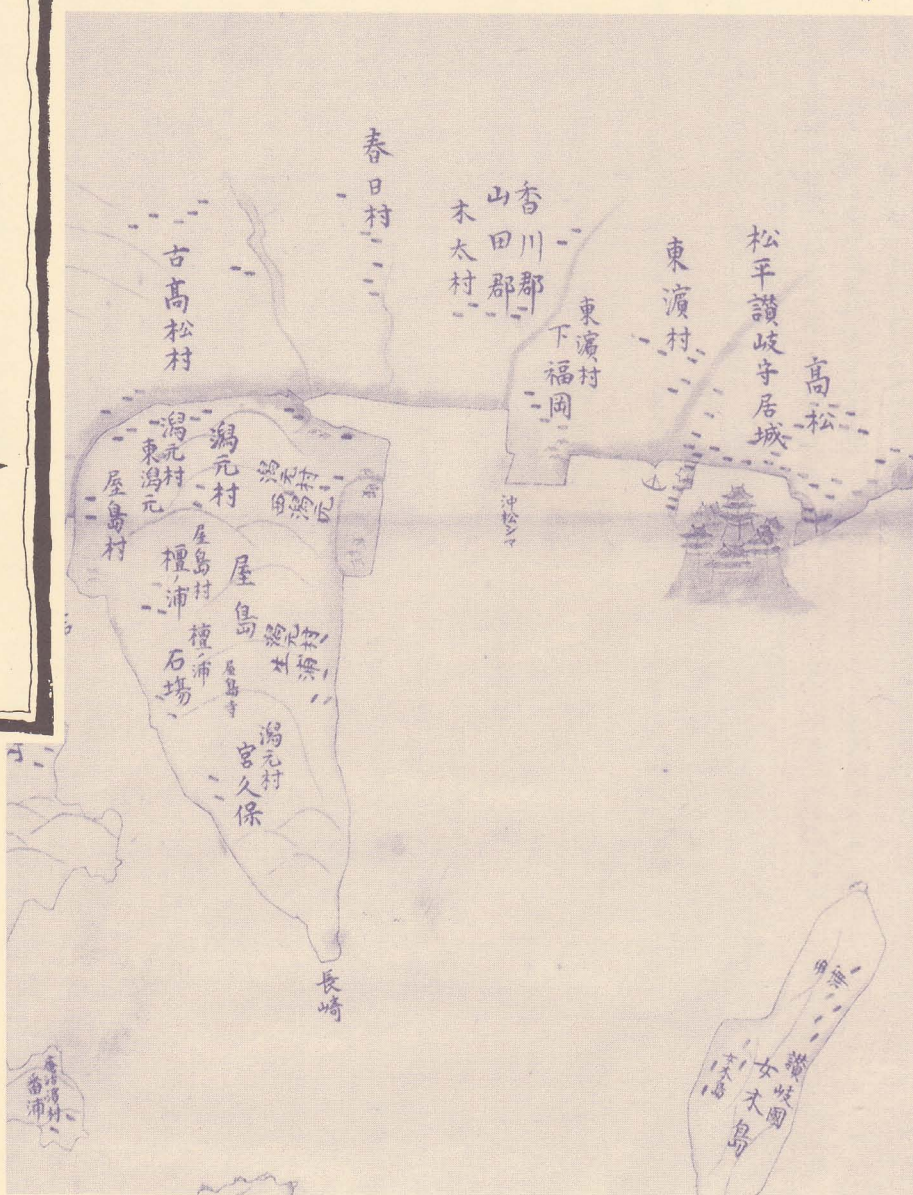


史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇〇九年 第五七号



表紙図解説 米国議会図書館所蔵

伊能大図第146号 高松（部分）

磁針にご注意、南が上になっている。香川県北端部、水城として名高い（地図の表現にも表れている）高松城、屋島を切りとった。海は備讃瀬戸、小豆島（岡山県）も程近い。

第六次（文化五年（一八〇八）一月～六年一月、四国・大和路）の測量で、淡路島福良浦から阿波岡崎村に渡り、徳島をへて時計周りに四国を周回し、（途中高知↓笹ヶ峰↑川之江村の横切測量あり）、岡崎村に繋いで福良に戻る。讃岐は四国の最終行程にあたる。丸亀から金毘羅に参ったのち、高松に向かう前、約一週間をかけて塩飽諸島を測量、十月一日には本島泊浦で日食の観測を行っている。日記に「食二分二厘を測得る」とある。四国本土に戻り、十月七日高松城下に入る。その日のうちに新湊番所前まで横測（湊記号の脇の測線）、さらに東濱村まで測り越して城下に戻る。城下の記述は少ない。風待ち一日をはさんで再び島々へ、まずは右下に見える女木島、桃太郎伝説の鬼が島に擬される島である。男木島、直島などから小豆島を測って高松までおよそ二週間、瀬戸内地域の入り組んだ測量コースである。

高松藩には、のちに坂出の塩田開発で知られる久米栄左衛門（通賢）がいた。間重富に学び、精密な測量器具を製作、伊能測量に先立つ文化三年に藩内を実測し、近年その下図が発見され評価が高い。伊能隊の案内役をつとめ、「久米栄左衛門：日々出勤」と日記にあるが、ほかには事前の訪問に「深更につき会わず」とあるだけで、交流の様子はうかがえない。

屋島の根元の測線は両側が海に開く相引川の水路に沿う。左端の馬立石は弓を射る那須與一の馬の足場と伝えられるもの、今は埋立地の水路奥にある。檀ノ浦（平家終焉の壇ノ浦は下関）もほとんどが造成地に姿を変えている。 鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次 57号

巻頭

史跡探訪7「御用地館」

話題Ⅰ

伊能家の曼荼羅と梵字碑
二〇〇九年度総会報告
二つの地図展―横浜・新宿

話題Ⅱ

講演「江戸文明と『伊能測量』」
『自神奈川至小田原東海道図』
伊能測量隊が宿泊したわが家
伊能大図総覧の地名と景観（十一）
伊能図の楽しみ方体験記
法隆寺絵図余話

芳名録

守屋源次郎 小林一郎

研究ノート

伊能忠敬、旅先で方位や緯度測定
伊能忠敬研究（七）忠敬の見た風景
柏木家文書（三）
間宮林蔵とゴロヴニンとの出会い
伊能忠敬、測量先で古里の人々と会談
名著『伊能忠敬』（二）

忠敬談話室

お便りから 日々の話題 お知らせ
表紙図解説 鈴木純子

谷垣 忠利

一

編集部

二

編集部

四

星埜 由尚

八

大沼 晃

一一

谷垣 忠利

一二

星埜 由尚

一三

大沼 晃

二二

柏木 隆雄

二九

江口 俊子

四八

伊能 陽子

三〇

佐久間達夫

三二

石谷 春香

三八

柏木 隆雄

四九

河島 悦子

五六

佐久間達夫

六〇

前田 幸子

六六

編集部

七一



史跡探訪7 「御用地館（住吉屋歴史資料館）」

◇所在地 兵庫県豊岡市竹野町竹野四二二 ◇概要 但馬国竹野港の庄屋で北前船の船主の住宅だった十八世紀末（推定）の建物を復元した施設。◇平成十三年に竹野町が買取り平成十四年三月修復完成。

「三百年以上の歴史をもつ住吉屋は、竹野村の庄屋として栄えてきました。文化三年には伊能忠敬が全国測量の宿として、また翌四年には儒学者柴野栗山がここを訪れて書を残しています。」（『住吉屋歴史資料館』のパフレット冒頭）かつて忠敬先生が宿泊した「御用地館（旧住吉屋）」の前に立つ谷垣忠利会員

伊能測量隊が宿泊した「御用地館」と「我が家」

案内人

兵庫県豊岡市在住 谷垣 忠利

豊岡市竹野町に「御用地館（旧住吉屋）」があります。「御用地館」というのはこのあたりの昔ながらの呼び名をとってつけた愛称で、文化交流施設「住吉屋歴史資料館」というのが正式名称だそうです。

住吉屋（永田家）は、江戸時代から続く竹野町の旧家で代々庄屋などを受け継ぎ、文化三年八月二三日に伊能忠敬一行が山陰海岸を測量した際、この家に宿泊しています。明治時代になると、住吉屋は北前船「栄寿丸」の船主として大きな財力をなし、その後も酒造、郵便局、鉱山、製罐所など手広く商売をしていたようです。現在住吉屋の土地は竹野町（現在は合併して豊岡市）に寄附されて建物は元のたたずまいに復元されていますが、神棚や仏壇は、かつての隆盛をしのばせるりっぱなものです。土蔵はギャラリーとなり、住吉屋の収蔵品と竹野町出身の書家・仲田光成氏の作品が展示されています。いま建物の管理をされている人の話では住吉屋の収蔵品は七、〇〇〇点ぐらいあるそうですが、伊能忠敬に関する資料は何も残っていないとのことでした。伊能忠敬がこのような歴史上の人物になるとは当時は誰にもわからず、資料が残っていないのは無理もないことかもしれません。

ところで私の家にも、文化十一年一月一八日に伊能測量隊が宿泊されたと測量日記に記録があります。当時の当家の建物は別の場所に移築されましたがそのまま残っており、「ああ、この建物に伊能測量隊が泊まったのか」と、近くを通る度に感慨にふけています。ちなみに、当家にも伊能忠敬に関する資料は何も残っていません。

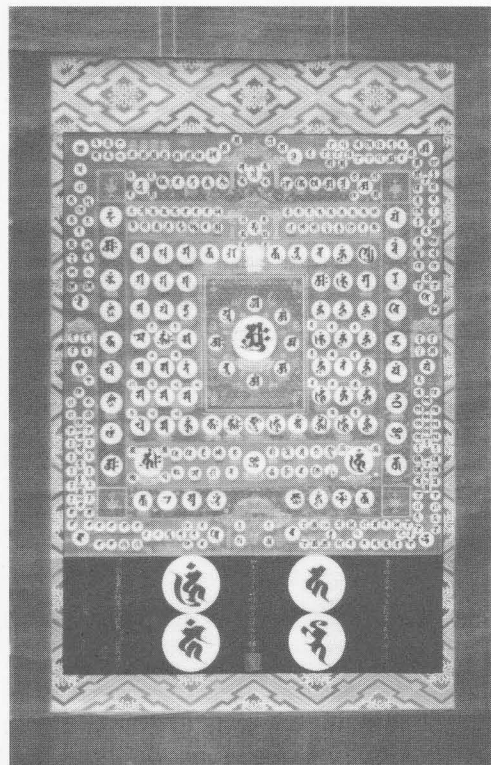
（たにがき たたとし・医師）

【一二頁「伊能測量隊が泊まった我が家」も併せてお読みください。】

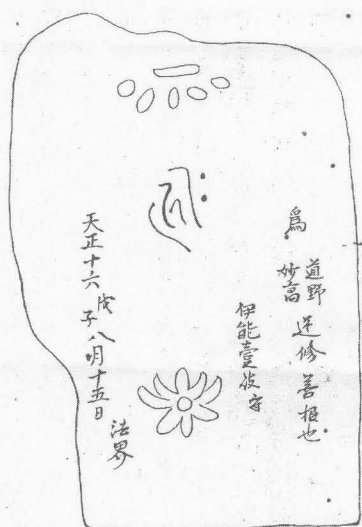
—伊能一族と菩提寺・観福寺—



光明真言



胎蔵界



「爲 道野 妙高 逆修善根也 伊能壹岐守
天正十六 戊子 八月十五日 法界」



伊能三郎右衛門家墓所にある梵字碑

伊能家の曼荼羅と梵字碑

木箱の中底に貼紙あり
享保十年（一七二五）研忍（景利）は享保十一年没

真言院如實研忍居士

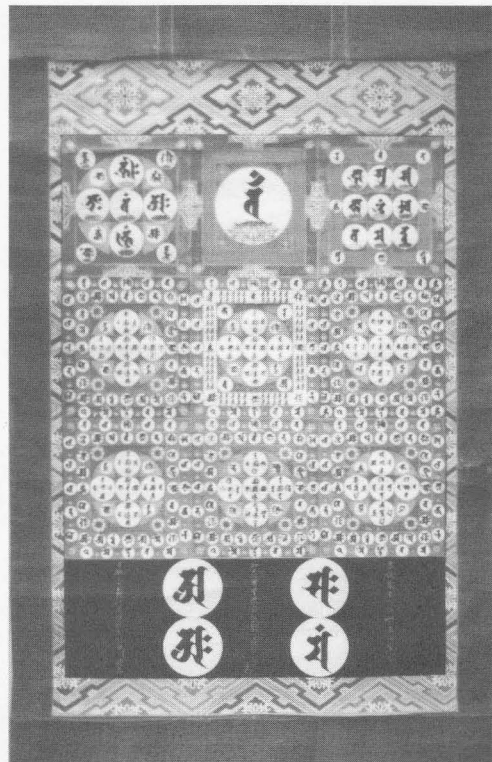
六月廿七日 五十九才

金剛界
光明真言
各万茶羅 三幅入
胎藏界
妙光山五十六代弘覚筆

伊能三良右衛門

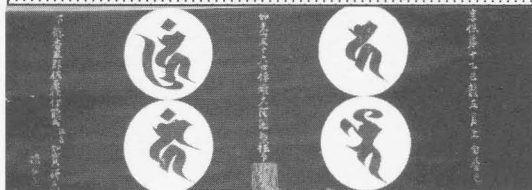


曼荼羅を収めた木箱の箱書
伊能淳氏蔵



金剛界

各曼荼羅下欄の書付と署名



胎藏界

享保第十乙巳龍五月上旬□之

妙光山五十六世傳燈大阿闍梨法印弘覚（朱印）

下総香取郡佐原住伊能氏法名如實研忍

授与之

光明真言

享保第十乙巳稔五月中旬任懸望書之

佐原伊能三郎衛門親研忍 授与之

妙光山五十六世傳燈大阿闍梨 法印 弘覚（花押）

積年六十二歳

金剛界

享保第十乙巳仲夏上旬捻之

妙光山蓮華院前観福寺 法印 弘覚（花押）

下総香取郡佐原伊能勘解由法名研忍

授与之

伊能家の菩提寺である佐原の妙光山観福寺は真言宗豊山派の古刹である。開基は平安時代（八九〇年）、本尊の聖観世音菩薩は平将門の守護仏といわれ、川崎大師、西新井大師とともに関東三大厄除大師の一つに数えられている。観福寺は中世以降伊能一族の信仰をうけるようになり、以来両者は深い関係を築いてきた。伊能家は代々壇頭（檀家の代表）をつとめる一方で歴代住職を四人輩出しており、そのうちの一人、観福寺住職第五十六世弘覚が忠敬の祖父景利に贈った「金剛界」「光明真言」「胎藏界」の三幅の曼荼羅が伊能家に伝えられている。また伊能三郎右衛門家墓所には天正十六年（一五八八）に伊能壹岐守が自分たち夫婦の逆修供養のため生前に戒名を刻して建立したといわれる梵字碑がある。

さらにあらたな歩みを進める年度に

編集 部

去る七月五日、二〇〇九年度の伊能忠敬研究会総会が深川の富岡八幡宮婚儀殿において開催されました。八幡宮様のご厚意により、結婚シーズンの日曜日にもかかわらず、今年の総会も「忠敬先生出生の地」である富岡八幡宮で開催できたことに感謝しつつ、全国から集まった仲間とともに交歓しました。事務局長の都合により、第一部に予定されていた講演と第二部に予定されていた総会の順序を入れ替え、先に総会を行い、そのあと星埜代表理事の講演を行いました。記念写真撮影はさんで懇親会と、終始なごやかに審議ならびに懇談がおこなわれました。

第一部 総会

総会是新沢義博さんの司会で進行、星埜由尚代表理事の挨拶のあと、柏木隆雄さんを議長に選出して審議を開始しました。

第一号議案 二〇〇八年度事業報告

鈴木事務局長より昨年度総会以降の二〇〇八年度の事業について報告がありました。おもな事業は昨年十一月三〇日から十二月二日に実施した山陽・四国への研修旅行、昨年スタートし、九月・十一月・一月・三月と隔月で四回実施した例会「伊能塾」、佐原支部ならびに九州支部で実施した例会等でした。また会報『伊能忠敬研究』は第五一号から五五号を発行しました。そのほか「完全復元伊能図全国巡回フロ



2009.07.05

ア展」について、昨年十二月には富岡八幡宮で全体プランの発表を、また今年三月に京都で復元図パネルの完成披露の報道発表を行いました。そのほかNPO法人化などの事項について報告がありました。

第二号議案 二〇〇八年度収支報告

二〇〇八年度の会計報告として、昨年四月一日から本年三月三十一日までの収支について鈴木事務局長より報告されました。ひき続いて清水靖夫監事より監査報告があり、出納ならびに帳票類などすべて適正である旨、報告されました。二〇〇八年度事業報告および会計報告は異議なく承認されました。

第三号議案 二〇〇九年度事業計画

同じく事務局長より二〇〇九年度事業計画について提案がありました。事業案の内容は今年度総会、「完全復元伊能図全国巡回フロア展」の実施、および昨年度より引き続いて年間三回程度の例会の実施、および会報『伊能忠敬研究』（第五六号から第五九号）の発行です。また「完全復元伊能図全国巡回フロア展」募金について八六名一、一七一、〇〇〇円（六月三〇日現在）であることが報告されました。

第四号議案 二〇〇九年度予算案

同じく事務局長より二〇〇九年度予算が例年並みの規模で提案され、二〇〇九年度事業計画ならびに予算案は異議なく了承されました。

第五号議案 役員改選

二〇〇九年度の役員の選任について事務局長より提案があり、下記名簿のとおり了承されました。

二〇〇九年度役員

名誉代表 渡辺一郎
(兼理事)

代表理事	星埜由尚	事務局長・調査研究担当
理事	鈴木純子	総務担当
理事	伊能敏雄	総務担当
理事	伊能洋	総務担当
理事	柏木隆雄	行事担当
理事	香取福良	総務担当・佐原支部長
理事	齋藤 仁	総務担当
理事	新沢義博	行事担当
理事	前田幸子	編集担当
監事	清水靖夫	
幹事	石川清一	九州支部長
幹事	小林一三	新潟支部長
幹事	原田照男	関西支部長
幹事	坂本 巍	HP「資料室」担当
幹事	野田 茂生	九州支部担当・支部長補佐
顧問	佐久間達夫	
顧問	安藤由紀子	
顧問	伊能 陽子	



第二部は星埜由尚代表理事により『伊能大図と地形図を比較する』と題して講演が行われました。(講演内容は八頁以下に掲載)

講演終了後、記念撮影をはさんで懇親会に入りました。恒例により遠方から参加された会員から御挨拶をいただき、各地域での旺盛な活動が報告されました。また、今回初めて参加された新入会員の方々の御挨拶に会員の注目が集まりました。ますます多士済済の研究会となりました。ことを喜びあいながら、今年度の総会も盛会の内に終了しました。



総会出席者

敬称略

秋間 実	浅井 京子	安藤由紀子	石井 友夫
石川 清一	井田福治郎	伊能 洋	伊能 陽子
大沼 晃	萩原 一輝	柏木 隆雄	加藤 忠三
喜多 昭一	木谷 道宣	窪谷悌二郎	小林 一三
小林 順三	齋藤 仁	坂本 義親	坂本 巍
島崎 恭一	清水 靖夫	新沢 義博	鈴木 純子
中川 幸子	成家 淑子	丹羽 菊乃	長谷川貞夫
馬場 良平	藤岡 健夫	星埜 由尚	前田 幸子
宮内 敏	矢能 彰	山浦佐智代	渡辺 一郎

※古川 愛子さん(長谷川会員付添)

36名

「完全復元伊能図全国巡回フロア展」開催基金募金について

代表理事 星 埜 由 尚

皆様、暑い夏をいかがお過ごしでしたか。

さて、先般お願いいたしました標記協賛金につきましては、おかげさまで、

九五名の方々より、一、三四一、〇〇〇円

が寄せられました。

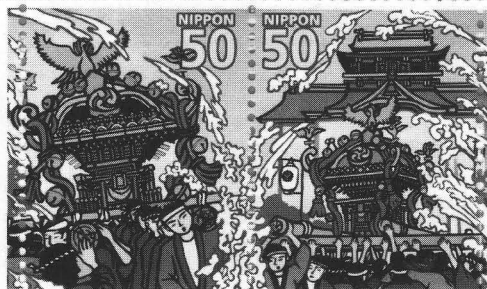
ご芳志は、展示資料製作費の一部として、中央実行委員会（募金委員会）あて、八月三日に、伊能忠敬研究会有志として、名簿をそえて送付いたしました。右、お礼とともに、ご報告申し上げます。

（なお、心ならずも時期を失した方、事務局窓口は開いております）

ふるさとの祭

第2集 深川八幡祭・東京都

神輿と水掛け



神輿と富岡八幡宮

二〇〇九年度総会講演 「伊能大図と地形図を比較する」

江戸文明と「伊能測量」

星 埜 由 尚

伊能忠敬の生きていた時代—江戸時代—は、封建制に基づいた武士の支配する社会であった。このことは、日本人ならば義務教育の段階で学習することであり、誰もが異議を唱えることはない定説となっている。江戸幕府を倒した明治政府にとっては、打倒の対象であった幕藩体制は非難されるべきものであり、江戸時代は頑迷固陋な幕府に牛耳られた暗黒の時代ととらえる向きが強かった。私のように戦後の教育を受けた者にとっても、小中学校、高等学校で学習した歴史では、江戸時代は封建時代として、近代によって克服された時代であるという風に学んだ記憶がある。

渡辺京二氏は、著書『逝きし世の面影』において、主として外国人による幕末・明治期の日本探訪記、日本滞在記などを渉猟し、外国人が日本人の生活や日本社会の特徴、さらに自然の美しさまでどのように見ていたか詳細に述べている。そして、親和的、自然一体的な社会、即ち「江戸文明」とも呼ぶべき江戸後期から明治初期にかけての日本社会の姿を浮彫りにした。

渡辺氏は言う。「文化は滅びないし、ある民族の特性も滅びはしない。それはただ変容するだけだ。滅びるのは文明である。つまり歴史的個性としての生活総体のありようである。ある特定のコスモロジーと価値観によって支えられ、独自の社会構造と習慣と生活様式を具現化し、それらのありかたが自然や生き物との関係にも及ぶような、そして食器から装身具・玩具に至る特有の器具類に反映されるような、そういう生活総体を文明と呼ぶならば、十八世紀初頭から十九世紀にかけて存続したわれわれの祖

先の生活はたしかに文明の名に値した。」

伊能忠敬の時代は、現代と比べると寒冷な時代であった。

そのため飢饉がしばしば発生し、一揆が頻発した時代でもあった。

一方、都市や郷村には、商業資本の蓄積が進み、富裕な豪農や豪商が現れた。伊能忠敬もその一人であった。このような豪農や豪商は、飢饉の際には救恤米などを放出し、飢民の救済に当たっている。富裕者にはそれなりの計算があったとは言え、使命感、責任感があったのも事実であろう。

農村や都市の経済発展に伴い、武士以外の層にも和歌や俳諧などの教養が広まり、町人も学問をするようになり、町人学者が輩出するようになった。間重富や伊能忠敬もその一人である。いわゆる「文化・文政時代」の町人文化の興隆である。一般の町人や百姓も寺子屋で読み書きの教育を受け国民全体としての教育水準も世界的にも高かったと言われている。

幕藩体制下において、国民の移動の自由はなかったが、民力の上昇とともに伊勢参りなどの旅も盛んに行われるようになり、名所・旧跡に対する関心が広がり深まった時代でもある。江戸時代は様々な掟や諸法度は厳格であったが、それは建前で実際の運用においてはかなりの柔軟性があったようである。江戸時代は村を単位とした共同体の社会であり、その支配の原則さえ認めて従えば、強い親和力に安住できる社会であったに違いない。

江戸時代の人びとは、平均寿命が短かったこともあり、恬淡とした死生観を持っていた。現世的な宗教による極楽往生を望み、慰安・娯楽と一体となった寺社への参詣など、極めて現世享樂的であったと言っても差し支えないだろう。



「逝きし世の面影」
渡辺京二著
2005 平凡社ライオン

多数の外国人が日本の自然的風景が素晴らしく、家屋の中を含めて清潔であると指摘している。渡辺氏は次のように言っている。「欧米人が讚美した日本の自然美は、あくまでひとつの文明の所産だったのだ。たとえば松林は照葉樹林を破壊したあとの二次林であり、萩は原生林ではなくそういう二次林にともなう植物である。」私流に言えば、日本の風景・景観の美しさは、点景の美であると思う。人工を排した自然ではなく、例えば、寺社や集落を配した山景や海岸景などに日本人は安寧感を抱く。

このような江戸の文明の中で伊能忠敬は、全国を測量した。伊能全国測量は、このような江戸の文明に暮らす人びとの社会、その織りなす景観を記録することになった。伊能忠敬の科学的精神は、想像や虚飾、誇張を排し、期せずして二〇〇年前の日本の姿を伊能図に表現し、後世に記録として伝えることとなったのである。

残念ながら、伊能測量は、全国を同じ密度で測量したわけではない。また、伊能図にすべての景観が描かれているわけでもない。従って、伊能図のみで二〇〇年前の日本の姿を完全に復原できるわけではない。しかし、伊能図や当時全国の津々浦々で作成された村絵図などを参考にするにより、当時の姿を現在の日本の景観と比べることは可能である。幸いにして、「測量日記」、亀絵図などもあり、そのような様々な資料から江戸文明の一つの要素でもあった当時の景観を知りたいというのが私の願いである。

二〇〇年前の景観を知ることにより、現代の無秩序で国籍不明の景観に反省を促すことにもなるだろう。

【伊能図と現在】北海道の東端、野付岬（伊能図では「フツケ」になっている）を見ると黒抹で家々が記してあり、集落があったことがわかる。現在の海面下にも集落があり、キラクという人口二〇〇人の町があった。測線が上がっているところに役所があったと考え

られ、クナシリに渡る際の通行改め役所だった。会津藩士の墓が残っている。砂洲が当時と比べて今はやせ細っている。

天塩（テセウ）川は伊能図でも曲がっているが現在も曲がっており、河口の地形も昔と同じである。昔はラグリーン（潟）があったが干上がってしまつて今はもうない。

焼尻島（ヤングシリ）は伊能図よりも現在の島の形の方が細長い。松前付近に見える夷下風（イゲツブ）、博奕石（バクチイシ）、唐津内（カラツナイ）という地名は今はない。博奕石は字がよくないので博多という地名になった。福島は松前城ができるまで陣屋が置かれたところである。

津軽の十三潟は湖の一部のみ測線が薄墨色で引かれているが、湿地帯だった。一関の近くにあった鬼死骸村という珍しい地名は、現在もバス停の名前として残っている。静岡の廣沼（浮島ヶ原）、三保の松原（池があった）は沼に沿って埋め立てられたので元の地形がわかる。田原の砂嘴は自動車工場になり、かつては湿地帯だった木曾川の三角洲は現在長島温泉がある。近江八幡の付近も湿地帯であったし、伊勢市の一帯も湿地であったが、干拓した。松江は水路が多いが、江戸時代に開削した運河である。長門市・湯本の大寧寺には大内義隆の墓があり、測量日記にも大寧寺は樹木が鬱蒼としていと書いてあるが、湯本温泉はこの時代はまだ温泉がでていなかったもので載っていない。

以上、興味ある事例はたくさんあるが、時間が来ましたのでこれで終わりにします。

（ほしの よしひさ・代表理事）



伊能図・東海道ロードマップを公開

「江戸時代の地図・絵地図」展

横浜・神奈川県立歴史博物館

平成二十二年六月二七日～八月九日、開港一五〇周年の横浜で「江戸時代の地図・絵地図」展が開催され、会報第五〇号で紹介された「自神奈川至小田原東海道図」のほか、江戸図、道中絵図、国絵図、分間絵図等、様々な江戸時代の地図・絵地図約三〇点が展示された。

江戸時代には縮尺や形などにはこだわらずに描かれた「絵地図」が一般的だったが、一方、縮尺と方位を正確に表した分間図や伊能図のような精密な「地図」も作られた。かつてないほど多種多様な地図・絵地図が作成され、様々な「地図」が出版されて多くの人々に利用されたのが江戸時代の特徴であり、村では手描きの村絵図が様々な目的で作成された。（説明文より）

【次頁】『自神奈川至小田原東海道図』について」参照



上・公開された「東海道図」

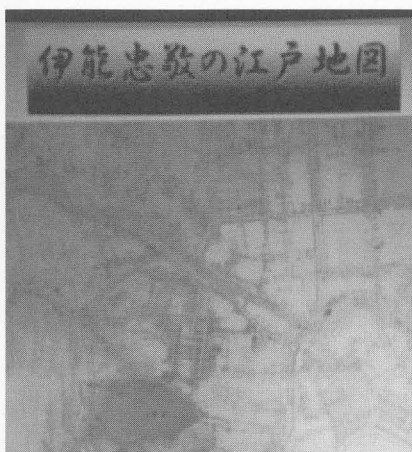
地図と絵はがきでみる新宿風景

「地図と絵はがきで見る新宿風景」展

新宿区・新宿歴史博物館

平成二十二年七月四日～八月二三日、新宿で「地図と絵はがきで見る新宿風景展」が開催され、清水靖夫氏（本会会員・新宿区文化財保護審議会委員）による講座「地図でみる新宿（前編・後編）」が実施された。

会場入口正面には伊能忠敬の大きな「江戸図」が展示され入場者を迎えた



次回は「富士講の世界」
(9月4日～10月18日)

神奈川県立博物館収蔵の伊能図

「自神奈川至小田原東海道図」について

大沼 晃

八月二日、「江戸時代の地図・絵地図」展を見学に向き、古宮学芸員から伊能図「自神奈川至小田原東海道図」(下欄参照 会報五〇号二五ページの紹介記事)や江戸図・道中絵図・国絵図・分間絵図等二十二点の展示資料の解説を聴く。博物館には大よそ一〇〇点ほどの地図が収蔵されており、伊能図はその中のひとつ。展示の地図・絵地図類は、江戸時代に作成・出版され、広く人々の目に触れられていたそう。江戸文化の水準の高さを再認識した。

日本図の流れは三つあり

一つ目は、貞享四年(一六八七)綱吉時代)浮世絵師石川流宣が描いた流宣図。同図は、おおよそ百年間にわたり日本図の主流の地位を保つ。

二つ目は、長久保玄珠(たかはる。号は赤水)が作成した赤水図。同図は、安永八年(一七七九)家斉時代)初版以降明治の初期まで、流宣図に代わり日本図のスタンダードタイプになる。

三つ目は、より正確な地図を作成したいと願い、日本全国津々浦々を測量して作成した伊能図。何でも江戸時代の初期にはすでに測量技術があったそうだが、費用や手間等々で全国踏破するという考えは何人も持ち合わせていなかったようだ。

県立博物館の伊能図との出会い

鈴木純子さんから情報によると、何でも当初、星埜さんが収蔵リストを見て何かを感じ、渡辺さんや鈴木さんに声を掛け、みなさんと博物館へ出かけ閲覧した結果、伊能大図から転写・作成した特別の道中絵図であることが判明。博物館側は一九九三年に入手したが、伊能研究会が訪れるまで詳しい由来等は一切分からなかったとのこと。その後の調査結果を尋ねたが、地図の余白に文字記載が無いので、誰がどんな目的で作成依頼したのか、不明のままだそう。

伊能図の特徴

大きさは広げると縦幅五三センチ、横幅二百十六センチのかんりの大判で、持ち運びしやすいように横に二つ折、縦に十二折で携帯出来るようになっていた。

川崎宿から小田原宿までの東海道と周辺の山川、お城、箱根山中の宮城野村や畑宿芦の湯までを丁寧に描いている。色彩も退色せず鮮明な色合いが現存している。

(おおぬま あきら)

「伊能図使ったロードマップ/県立歴史博物館で確認」会報第50号

東海道、色鮮やかに

伊能図使ったロードマップ
県立歴史博物館で確認

江戸時代の東海道、伊能図を基に作成された地図。伊能図は、江戸時代中期に作成された日本図の主流の地位を保つ。伊能図は、江戸時代中期に作成された日本図の主流の地位を保つ。伊能図は、江戸時代中期に作成された日本図の主流の地位を保つ。

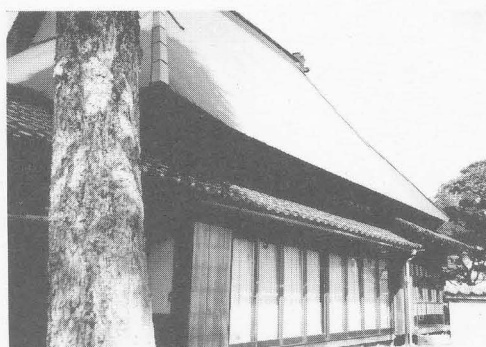


伊能測量隊が泊まった我が家

谷垣忠利

ここ兵庫県豊岡市は、数年前からこうのとの野生復帰で話題になり、全国から視察に来られる方も多くなりました。

私の家は代々谷垣與左衛門と名のり、同じ豊岡市の日高町知見地区で庄屋や百姓代をしていました。いま当家は別の場所に移っていますが、実は当時の当家の建物が日高町伊府地区の西田家に移築され、そのまま残っています。



測量隊宿泊当時の面影を伝える母屋

『測量日記』文化十一年（一八一四）正月（第八次測量・九州第二次）

同十八日 昨日より雪、今朝も降、午後止晴天。六ツ時後養父郡出石領高柳村出立。同所気多街道、村岡街道追分当十三日残置の印初、気多街道測、右に七面社、梅坂峠、恩田支配所九鹿村、小佐川仮橋十二間、枝岡、右八鹿道追分、昼休治郎右衛門、枝馬瀬小佐村、又八鹿村、左妙見道追分、字傘松、知見坂峠、気多郡田口五郎左衛門支配所知見村字大神、字中地、知見川渡る巾三間宛、止宿入口打止、街道一里三十二町五十七間、九ツ半時知見村着。止宿百姓代与左衛門、年寄新左衛門。



庄屋だった谷垣家を移築した西田家 左から土蔵・母屋・納屋が並ぶ

伊能大図総覧の地名と景観(十一)

星 埜 由 尚

老齢のため、伊能忠敬が参加しなかった第九次測量では、伊豆半島を三島から下田まで縦断し、下田から伊豆七島の測量のため大島に渡った。

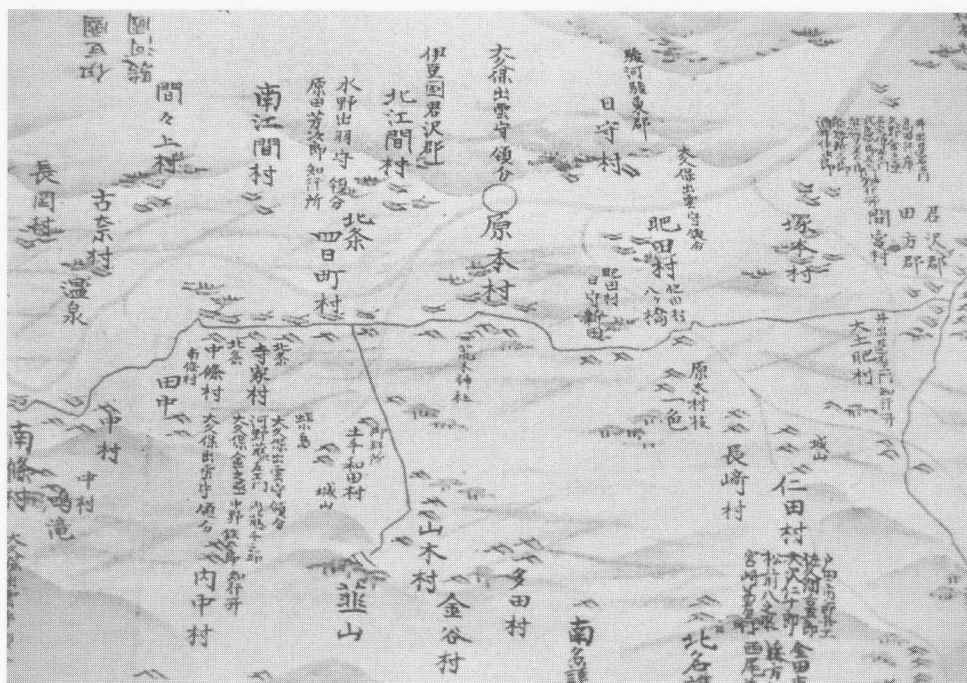
三島から下田まで

文化十二年(一八一五年)五月二日三島から測量を始める。三島から南下し、四日町村から葦山へ分岐する測線を延ばしている。葦山は、葦山代官江川太郎左衛門の陣屋が有り、陣屋の前まで測量したと「測量日記」には記されている[※]。葦山には木々に囲まれた大きな薨が描かれているが、これが陣屋であろう。「測量日記」には、「此時江川殿逢談」と記され、江川太郎左衛門英毅に面会したのである。

江川家は代々太郎左衛門を名乗り、葦山代官を継ぐ名家であり、英毅の息子は、幕末に活躍した江川太郎左衛門英龍である。葦山代官は、伊豆、駿河、相模一円の幕府御料所を管理した。江川氏は、もと宇野氏と言い大和の住人であったが、保元の乱に破れこの地に落ちてきて居住したと言われている。江川氏の館は室町時代に建てられた部分と江戸時代に修築された部分から成っており、昭和三十三年に重要文化財に指定されている、質素ではあるが豪壮な建物である。

※佐久間達夫「伊能忠敬測量日記」伊豆七島測量篇。以後「測量日記」の引用は、すべて佐久間達夫「伊能忠敬測量日記」による。

第1図 大図101号 葦山 (右が北)

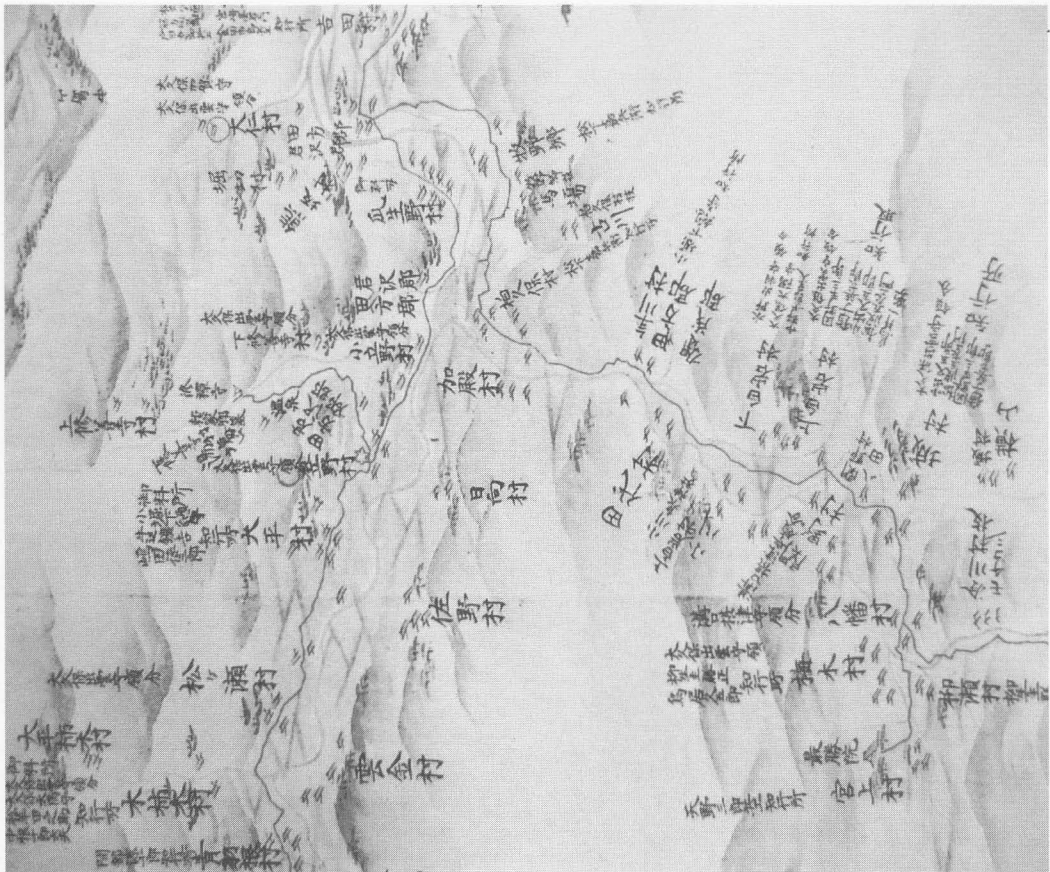


葦山の西に城山と言う山が描かれている。「測量日記」には、「(測線から) 右二町斗引込葦山古城、城主北条美濃守氏親、天正十八寅年落城、同十九年内藤豊後守居之其後破城、今麓に陣屋有」とあり、この城山が古城跡であろうと考えられる。第4図の地形図で高等学校(葦山高校)の裏山が城山に当たると。葦山高校の辺りは、現在でも「お座敷」と呼ばれ、北条早雲の館があったと言われている。

また、城山の近くには「蛭小島」の注記があり、「測量日記」には「蛭ヶ小島旧跡碑有」と書かれている。「蛭小島」は、源頼朝が流された地とされている。現代の地形図にも「蛭ヶ小島」の注記があり、公園になっている。但し、発掘しても平安時代の遺跡は発見できず、頼朝の配流地であるという証拠はないそうである。旧跡碑というのは、寛政二年(一七九〇)に建てられたもので、現在は伊豆の国市の指定文化財になっている。

*北条氏親は、氏規の誤りであろう。天正十八年の豊臣秀吉の小田原征伐の時には、北条氏規は、四万の大軍に対し、三千の将兵で城を守ったと言われている。

*佐久間達夫「伊能忠敬測量日記 伊豆七島測量篇」では、「今麓」となっているが、「今麓」の誤りではないかと考える。従って「今麓」とした。



第2図 大図101号 修善寺



第3図 彩色地形図「修善寺」の一部

翌日(五月三日)は、四日町村から寺家村、中条村、大仁村などを通り、本立野村まで測量した。四日町村、寺家村、中条村の三村合わせて北条という「測量日記」には記されている。「測量日記」にも記されているが、この辺りには、堀越御所跡、北条時政墓など北条氏、足利氏にまつわる旧跡が多い。第1図に描かれている川は、狩野川である。狩野川を渡った左岸には、古奈村、長岡村があり、古奈村には温泉と注記されている。古奈村は、相模国荻野山中藩主大久保出雲守教孝の領地であり、「測量日記」には、陣屋在りと書かれている。大図には、陣屋のような建物は描かれていない。古奈村、長岡村は、現在の伊豆長岡温泉である。

狩野川の右岸を走る測線は、大仁村で狩野川を渡る。渡河の手前でこのあと伊豆七島測量後伊東から冷川峠を越えて測ってきた測線が分岐している。この測線は、文化十二年十二月七日から十一日まで伊東から往復している。「測量日記」には大人街道と記され、大仁村も大人村と「測量日記」には記されている。第2図には、冷川村枝モチコシ、柳瀬村、八幡村などの村が描かれているが、「測量日記」には、人家散在と記載され、谷の中に農家が点在する風景を想像することができる。柳瀬村では、測線に沿ってきた冷川が大見川に合流する。両川とも大図にはその名称が記載されていないが、「測量日記」には冷川大見川落合と記され、大見川は、天城山を源流とすることが述べられている。

第2図を子細に見ると、柏久保村と牧之野郷の間に短い測線がわずかに狩野川の方へ分岐しているのに気がつく。「測量日記」をみると、十二月九日の測量では、牧野郷と柏久保村の境界の付近に「天」の杭を打ち、そこからは無測で大仁村の下田街道まで進んでいる。この間は、

第4図 彩色地形図「葦山」の一部



大仁村に打ってあった「天」の杭から逆に伊東街道を進み、「天」に繋いでいる。「天」の杭の西側には天神の森があり、第4図を見ると、現在もほぼこの位置に神社の記号がある。

大図には神社の注記はないが、短い測線の分岐は、「天」を示しているものと思われる。伊豆箱根鉄道駿豆線の終点修善寺駅は、かつての柏久保村に位置している。

柏久保村、牧之野などこの周辺の村は松下嘉兵衛*という旗本の知行

*文政旗本武鑑を見ると松下加兵衛三千石と出ている。大身の旗本である。



第5図 江川邸



第6図 蛭ヶ小島旧跡碑

所であった。牧之郷には、青い屋根の大きな葺が描かれているが、これは松下嘉兵衛の陣屋であろう。城村から最勝院への測線が分岐している。「測量日記」によると、最勝院は、三代將軍家光から御朱印十七石六斗を与えられ、開基は関東管領上杉憲清で、多数の堂宇が立ち並んでいると書かれている。永享五年（一四三三）創建で、現在も千四百余の末寺をもつ古刹である。

元に戻り、五月三日に大仁村（「測量日記」では大人村）で昼休みを取り、狩野川を渡っている。狩野川は舟で渡り、巾が四十五間であった。約八〇mである。瓜生野村は、御料所であり、江川太郎左衛門の代官所があった。狩野川には中に島があったと「測量日記」には書かれているが、第2図を見ると、狩野川が分流し、川の間が緑色に彩色されている。一周三町ばかりであると記されているが、図から見るとより大きい印象を受ける。

本立野村から修善寺まで測線が分岐している。本来修善寺は地名であり、寺名は福地山修禅寺と言う。御朱印三十石と「測量日記」には記されている。温泉の注記があり、頼家卿墓がある。

下田・石廊崎

修善寺から下田まで本立野村、茅野新田、梨本村、箕作村と宿泊して天城峠を越え下田に着いた。狩野川に沿って進み、数回狩野川を渡っているが、飛び石伝いに渡ったことも「測量日記」には書かれており、天城峠は「樹木繁茂雲霧ふかし」と記され、人家もなくなかなかの難所であったようである。

箕作村から下田に向かう途中では、立野村から分岐して蓮臺寺村に向かい蓮台寺温泉まで測線を延ばしている。温泉と注記され「測量日記」には、湯壺二ヶ所と書かれている。この温泉は、現在も蓮臺寺温泉として有名だが、伊能測量隊がわざわざ蓮臺寺温泉まで測線を分岐させたのか、その理由は「測量日記」を読んでも不明である。蓮臺寺村は三枝主計という旗本の知行所で、山裾に陣屋があると「測量日記」には書かれているが、大図には、それらしき建物は描かれていない。蓮臺寺村から下田に向かって立野村中野瀬とあり、竹麻神社と注記され赤く塗られた建物が小さく描かれている。「測量日記」には式内社で八幡宮と称されると書かれているが、現在は地形図を見ても、中野瀬の地名も神社も見あたらないが、竹麻神社は、地形図の高馬（居住地名は本郷）に存在することをインターネットを検索して知ることができた。

大図には、現在の下田市市街に当たる部分に、下田町と中田町という地名が記されている。上田町があってもよさそうだが、上田町という地



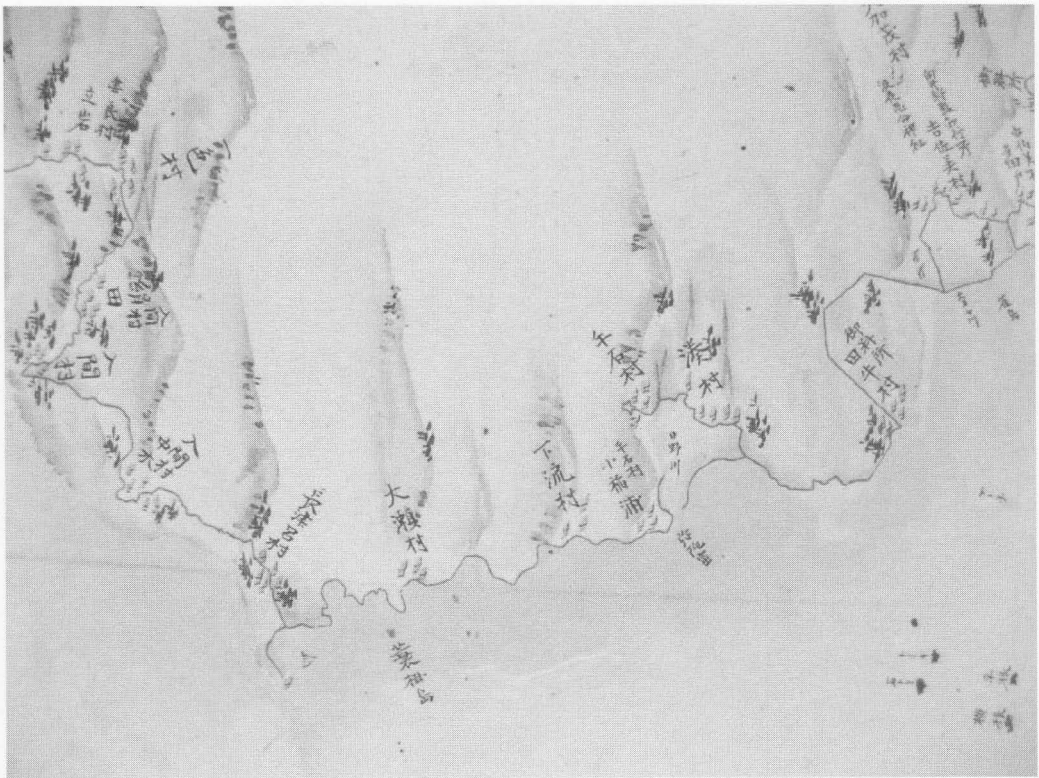
第7図 大図102号 下田

名はない。現在の下田には、稲生沢川の対岸に中という地名があるが、中田町と関係があるのか、筆者もそこまで調べていないのでよくわからない。地形図と大図を比べてみると、稲生沢川は、現在にくらべやや西に寄っており、現在の市街は稲生沢川を埋め立て、東に河道を寄せたあとに拡張しているように見える。そもそも稲生沢川河口の東側は海岸線も直線状で黄橙色の彩色があり埋め立て又は干拓により造成された印象を受ける。河口の先端には、測線が海の中にわずかながら延びており、栈橋があったのであろう。

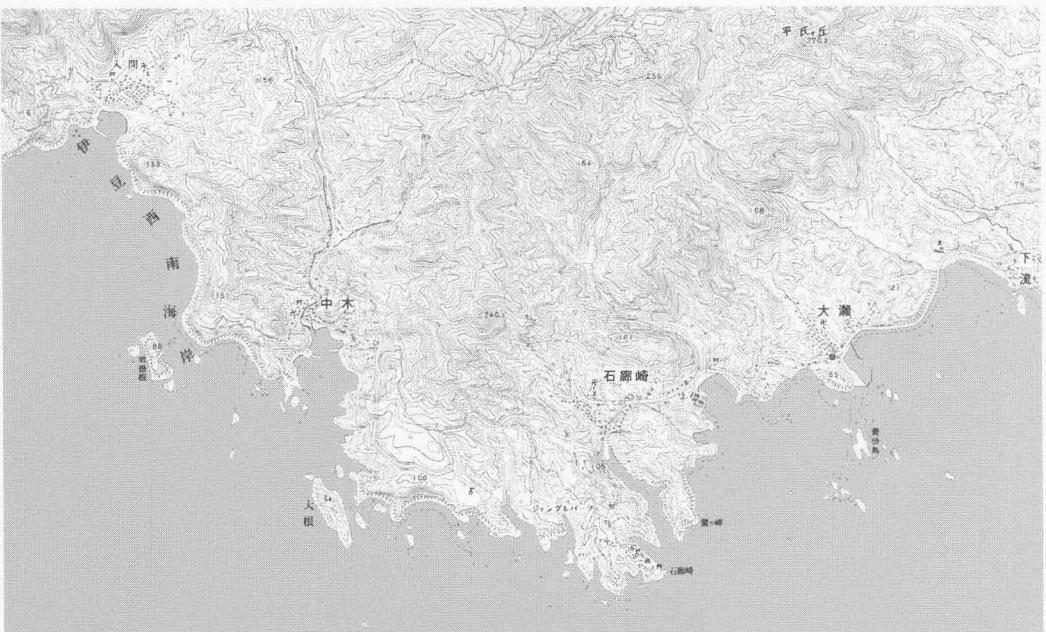
下田には、寛永八年（一六三一）下田奉行が置かれ、江戸に入る舟の取り締まりに当たったが、関東の経済の発展に伴い、享保五年（一七二〇）に下田奉行は廃止された。その後、外国船の出没に伴い天保一三年（一八四二）に再び下田奉行が置かれた。その後の下田における幕末外交の推移は周知の通りである。従って、伊能測量当時は、下田奉行は置かれていなかった。そのため、「測量日記」にも下田奉行所のことはいない。しかし、下田奉行が置かれていた間、幕府は下田の湊の整備を行ったものと考えられる。そのあとがこのような稻生沢川河口部の状況に残っているのであろう。



第8図 彩色地形図 「下田」「神子元島」の一部



第9図 大図102号 石廊崎



第10図 彩色地形図「石廊崎」の一部

下田の南には城内という地名が記されているが、ここは下田城(鶴島城)のあとで、地形図にも城跡の記号が見られる。北条氏が秀吉の関東攻めに対抗して立てこもった城である。現在は公園となり紫陽花が美しい。下田から東に向かつて海岸に出ると白浜海岸で、大図には白浜村原田村と記された集落に「伊古奈比咩命神社」がある。現在は白浜神社と呼ばれ、伊豆最古の神社であると言われている。

吉佐美村は、第二次測量と第九次測量の二回にわたって測量されたところである。吉佐美村の奥には大加茂村があり、大図には波夜志命神社の注記があるが、「測量日記」には、林之神社と記され、祭神不知と書かれている。大カモ川(現名大賀茂川)は、渡幅十二間と書かれているので、川幅二〇m強あったようである。

第二次測量では、享和元年五月一七日に下田町を出立し手石村まで測量している。吉佐美から田牛村、湊村を通過し、日野川を渡って手石村に到着した。日野川は川幅が広く橋が架かっていたと「測量日記」には記されている。日野川は、地形図には青野川と注記されている。大図を見ると手石村には☆印があり、天測を行ったことが知られるが、「測量日記」には天測については記述されていない。手石村では、雨が続いたことが「測量日記」には記されており、翌一八日には大図に記載されている弥陀窟へ行き、測量しているので、この晩に観測したのであろう。しかし、翌日も朝六ツ頃(六時)小雨、六ツ半(七時)前から晴れたと「測量日記」には書かれている。

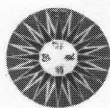
手石村で測線は途切れ、海岸線の測線と弥陀窟の測線とが繋がっていない。ここから下流村、大瀬村を経由して石廊崎まで測量している。こ

の辺りの海岸は大難所であると「測量日記」には書かれている。石廊崎には石廊権現があり、「測量日記」には熊野崎というように記されている。第八図の大図(国会大図)には、測線が岬の先まで分岐しているが特に石廊権現の記載はない。アメリカ大図には、石廊権現の注記があり、社が描かれている。

長津呂村から測量隊を二つに分け、平山宗平、伊能秀蔵、尾形慶助には、山道を測量させた。忠敬と平山郡蔵は舟で海から海岸を見分している。海岸線の測量は不可能に近かったのであろう。現在も断崖絶壁の続く海岸である。

掲載した伊能大図は、すべて国会図書館所蔵の伊能大図であり、「伊能大図総覧」から転載した。地形図は、すべて(財)日本地図センターの彩色地形図を転載した。「測量日記」の引用は、すべて佐久間達夫「伊能忠敬測量日記伊豆七島測量篇」による。

(ほしの よしひさ・代表理事・(社)日本測量協会副会長)



伊能図の楽しみ方体験記

大 沼 晃

歴史や地図好きの小生は、研究会に入会以来、長年ひとりで伊能図を眺めながら楽しんだり、イベント旅行に参加するだけの会員であったが、最近ある出来事をおして奥深い楽しみ方を見つけた。

広沼との出会い

横浜開港記念日の六月二日、完全復活伊能図巡回フロア展を見学に大棧橋ホールを訪れた。会場に入ると、渡辺さんや星埜さん、斉藤さん、鈴木さん等々会員の重鎮たちが見学者たちに接しながら説明している姿を目のすみに入れながら、小生の若き日の赴任先であった南九州から順々に、転勤先での思い出話に花を咲かせながら地図の上を北上中、星埜さんからお声がかかり、駿河国をよくよく眺めると原宿―吉原宿間に大きな沼があり、沼の周辺には葦らしいものがうつすらと描かれていた。小生の頭の中には、駿河から遠江にかけてある湖沼は浜名湖しか思い浮かばなかったが、星埜さん曰く「現在、この広沼は無く、何故無くなったのか分からない」との説明があった。そこで、小生曰く「清水の次郎長親分が幕末から明治にかけて開墾したのではないですか」と軽く言葉を交わした。

帰宅後、気にかかるのでインターネットで検索したところ「広沼」では該当項目が無いので、富士市の広報へ問い合わせたところ、その件は富士市立博物館へ照会中と回答を頂く。翌日、博物館の学芸員井上卓哉氏から「丁寧なメールを頂き「広沼」は「浮島沼またはふじ沼」

と呼ばれているとのこと。博物館収蔵資料の東海道五十三次「吉原 ふじ沼」(歌川広重作)の浮世絵を見て、伊能図が描く平面的な沼から連想できない当時の周辺の風景(富士山―愛鷹山―広沼)を垣間見る事ができた。また、以前企画展開催時に作成した浮島沼開拓に関する冊子もあるとのこと、渡りに船とばかりにオーダーした。

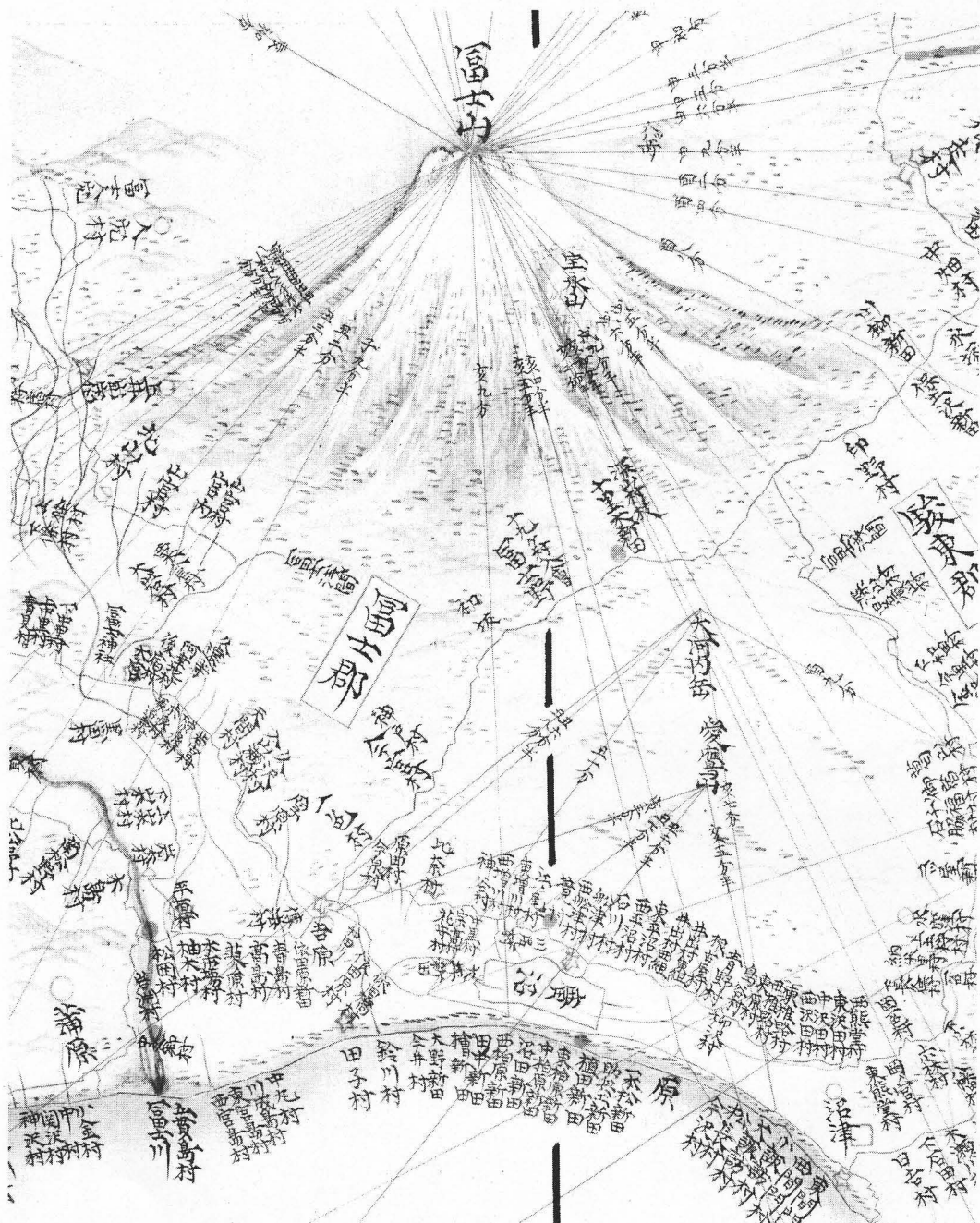
そうこうしながら我が家の宝物のひとつである蔵書「伊能中図原寸複製 伊能図(武揚堂)」を紐解きながら調べ始めたら、ありがたいことに四十一ページに現代図との比較(伊豆箱根付近の今昔 上・下図)として、次のように大きく取り上げていることに気づいた。比較対照とする九項目の中に、湖沼Ⅱ(以下引用文)「富士市中里付近にあった廣池、長泉町長窪付近の沼がなくなっているのはいつごろなのか調べる対象になります」。

さらに同ページには(以下引用文)「古きをたずねて新しきを知る」ということは、古い地図を見ているときによく当てはまる言葉です。その意味から全国を実際に測量して歩き作られた伊能図は、現代の地図と重ね合わせられるほど正確なので、比較しやすくて役に立ちます。二〇〇年以上前の日本の姿が今日どのように変わっているのかを探したり、どうして変わったかを推理・想像してさらに他の資料などを調べて確認してみると伊能図を見る楽しみがより深くなります」。

このことは小生にとって、まさに天から授かった啓示のようなもので、きっかけを与えてくれた星埜さんに感謝申し上げる次第である。

沼の歴史と由緒

次の段階で、インターネットで「ふじ沼」をキーワードにしながら検索したところ由緒ある面白いお店を発見した。浮世絵でつづる「川



伊能中図 (旧ペイレ氏蔵)「富士山周辺」(部分)
富士山南方・経線(黒線)上に「廣沼」が見える

勇」の歴史、墨田区本所石原にある創業一〇〇年を売り物にしたうなぎ屋さんだ。同店のホームページを拝見すると、先々代は何でも原宿―吉原宿の中間にある間宿柏原（十軒足らずのうなぎ茶屋、旅籠で、現在の東田子の浦駅周辺）から駆け落ちし、東京へ出て現在地で開業したというエピソードがあるとか。間宿柏原はどこなのかと伊能図で探すと、植田新田と東柏原新田の中間に赤丸印があり、駅町であることが読み取れる。その地は、沼津から吉原までの中間地点であり、旅人は風光明媚な景色を見ながら東海道の名物でもある柏原のうなぎやしじみ汁を食し、一時の休息を取ったのではないかと推理・想像した。あまりにも美しいので、浮世絵ばかりではなく古来から歌に詠われたり、紀行文にも登場しているとか。

★楽しみ方 その一 Ⅱ 旅行記や測量日記から連想するⅡ

紀行文といえど伊能忠敬関連では隠居する前年の寛政五年（西暦一七九三年、四十八歳時）に出かけた折の日記「伊勢参宮・関西旅行記」が我が家にあることを思い出す。測量日記全巻を解読した佐久間達夫氏からお分けいただいた冊子を紐解くと次のような記述があるではないか。

（寛政五年三月）八日 三嶋明神を拝しける社領云々（略）一里半経て原二至る宿を離れ右之方富士山足高山浮島が原並二沼見ル三里経て吉原二至る此宿東南に有しが延宝年中高潮にて民家悉破損二付天和二年今の所へ行し也右ニ善徳寺の御殿へ行道あり善徳寺ハ酢の名処なり昔平家の軍兵水鳥の羽音ニ驚逃去し所を浮嶋が原共いへ御沙汰ありて此善徳寺に議定せしとやむかしふじ沼と云し処なりと云々（以下略）

伊能忠敬一行はこの地で休憩を取り、茶店の主人と会話を交わしな

がら土地の由来・伝承等の情報を得たであろうと想像する。延宝は西暦で一六七三年から一六八〇年までの八年間、天和二年とは西暦一六八二年であるので、一〇〇年以上前発生した高潮被害のことを茶店の主人と会話をしたのではないか。今風に言うところ「風光明媚なところで仕事が出来るとみなさんは幸せだね。長生きできるね」「いやいや旅の衆、この地はいったん風雨が吹き荒れると洪水になり、人家や畑が押し流され大変なのですよ」等々。よほど甚大な被害であったために土地の人々は子々孫々に言い伝えたのだろう。また、遠い昔の出来事を忠敬は几帳面に日記に残した理由として、風水害による農民の苦勞を佐原の名主として一番知り尽くし、体験しているので心に深く受け止めたためではないだろうか。次々と連想が湧き、測量日記にはこの地のことをどのように記しているのか興味を抱いた。残念ながら測量日記はわが手元には無いので、またもや佐久間氏にSOSを出し、資料請求のお願いをする。

六月二十日、佐久間氏から次のようなお手紙と測量日記が送られてきた。

【問い合わせの沼津から吉原までの測量日記の記述は、第四次測量の往路、第五次測量の往路・帰路、第六次測量の往路・帰路、第九次測量の帰路などに記されています。

その中で、「広沼」「浮島ノ原」のことは、第九次測量の伊豆七島測量（伊能忠敬は、老齡の為不参加。隊長は、永井甚左衛門）の帰路、熱海より三島―御殿場―十里木新田富士山の裾野―吉原―人穴村（現富士宮市）までの測量の帰りの文化十三年二月二十三日の日記に記されていました。「第四次、第五次、第六次」の測量日記には記されていません。（以下略）

伊豆箱根付近の今昔



伊能中図



現代の地図

『伊能中図原寸複製 伊能図』（武揚堂）

第九次の測量日記には、次のように記述されており、当時の広沼の大きさが推測できる。

【二月二十三日 晴曇。午後風。（略）従是広沼へ打下、左側許大久保出雲守領神谷村、右側神谷村枝川尻、玉虫忠四郎知行所西川尻村、大久保七兵衛知行所東川尻村入会、但し中里村、神谷村人家も入込也。広沼堤上に至て㊦印を残す。（㊦印は、測量杭を立てた箇所の符号）打下横物十三町三間。従是右沼周り神谷村堤、川尻村堤、須津川尻十二間。東増川村、西増川村入会堤、右舟入小屋、小溝巾三間、江尻村堤、万久ヶ沢巾六間、中央郡界迄㊦印より十四町駿東郡西船津村堤、総名浮島ノ原という名所なり。（略）東街道立場西柏原新田止宿。浮島屋利右衛門。夜星測。沼中の名産鮒、鯉、鰻、鰻、人家の南一町計田子ノ浦也】。

【二月二十四日 曇、東海道立場西柏原新田出立。同所止宿測処より始め、広沼へ打下二町二十七間堤上に㊦印を残す、是より郡界へ行。昨日の打止㊦印始字山伏塚、松の前に残す。㊦印に繋ぐ迄八町四十五間。江川太郎左衛門支配、内藤駒之丞知行田中新田堤、宇東堤を行。沼川清友橋長三十一間。江川太郎左衛門支配大坪新田、石田督三郎知行所中里村堤㊦印に繋ぐ。広沼一周終る。㊦印より二十四町五十一間二尺。兩日合広沼一周二里二十四町五十四間二尺。（後略）】。

因みに、富士市立博物館の資料によると「浮嶋ヶ原低地は、愛鷹山南方にある舟形帯状低湿地帯で、沼津西部の片浜から富士の和田川付近まで、東南一三km、南北二km、面積にして二〇キロ平方メートルを

占める地域で、明治のはじめまでは、まだ沼の中心部は水をたたえた沼湖で、付近には葦が良く茂っていた」と記述されている。

★ 楽しみ方 その二 Ⅱ 浮世絵から情景を連想するⅡ

六月十六日、富士市立博物館から待ちに焦がれていた資料（冊子二冊と浮世絵のCD）が届き目を通すと、古代からの浮島沼の移り変わりが時代ごと（縄文・弥生・奈良平安・江戸・明治・昭和）に図柄で表記されており（八頁参照）、開拓のあゆみと農民の苦闘の様子が理解できた。しかし、次の三枚の浮世絵を見て伊能忠敬一行が眼にしたであろう、当時とあまり変わらない風景（柏原から大野新田にかけて富士山が左右相似形にたおやかな稜線を広げる景勝、また沼には富士・愛鷹の山容が映り、海へ目を転じても絶景が連なる白砂青松の田子の浦）を、人それぞれが感じたまま連想するのもいいのではないだろうか。

《浮世絵》

一、東海道五十三次「原」（図1）

- ・ 荷物を担ぐ供連れの女性の旅人は武家か町人か
- ・ 葦の伸び具合から見て季節はいつごろなのだろうか

二、東海道五十三次「ふじ沼」（図2）

- ・ 前方の漁師は網で魚を獲っている。後方で竿を垂れている二人づれは漁師なのか農民なのか
- ・ 富士の左裾がほんのりと赤くなっているが、朝方の漁なのか夕方なのか

三、富嶽三十六景「駿州 大野新田」（図3）

- ・ 牛の背に乗せているのは葦のように見えるが、何をするために刈り取ったのか
- ・ 沼の上空を飛ぶ水鳥は、平家の軍勢を驚かせた鳥なのか

浮世絵に
見る広沼



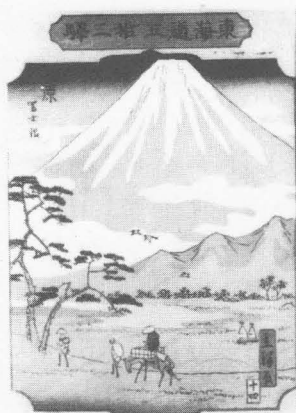
図1 東海道五拾三次之内「原」 広重画



図2
五十三次吉原「ふじ沼」三代目広重画



不二三十六景「駿河富士沼」広重画



東海道五拾三駅「原・富士沼」二代目広重画



図3 富嶽三十六景「駿州大野新田」 北斎画

★楽しみ方 その三 Ⅱ文学に表れる浮島沼を連想するⅡ

富士市立博物館の冊子で紹介されている書物は、「東関紀行」、「海道記」、「太平記」、「改元紀行」、「東海道中膝栗毛」など。そこで、どなたにもなじみ深い江戸後期の代表する大ベストセラーである十返舎一九の道中記を覗いて見よう。一九は明和二年（一七六五年）駿河の府中（静岡）生まれ。忠敬は延享二年（一七四五年）生まれで二十年の歳の差がある。しかも、膝栗毛の出版は享和二年（一八〇二年）からであるので、忠敬は恐らく読んではいないだろう。大人向けの現代語訳「東海道中膝栗毛」（訳者伊馬春郎、小谷恒）本の箱根―蒲原（原ヨリ吉原へ三里六丁）から引用文は、

【今くひしそばはふじほど山もりに
すこしころもうきしまがはら

新田という宿場についたが、ここはうなぎが名物である。家ごとに

扇ぎ立てる蒲焼の匂いに、二人は鼻の先をうごかしている。

蒲焼のほひを嗅ぐもうとましや

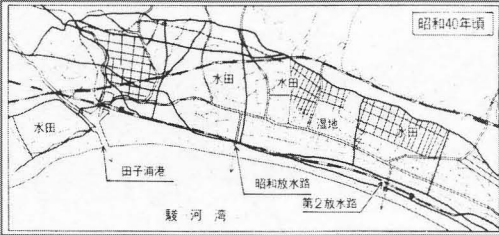
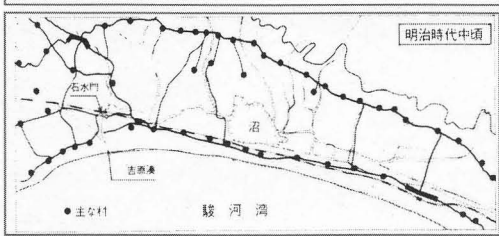
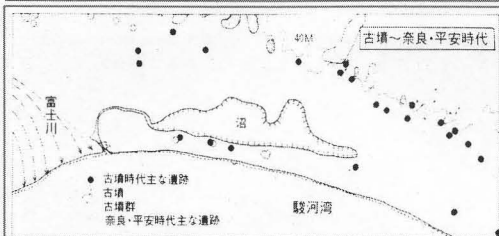
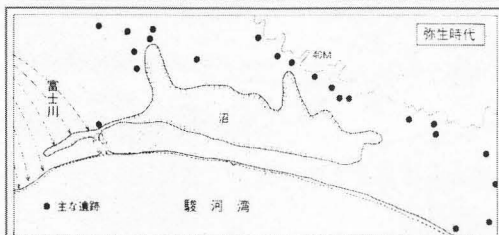
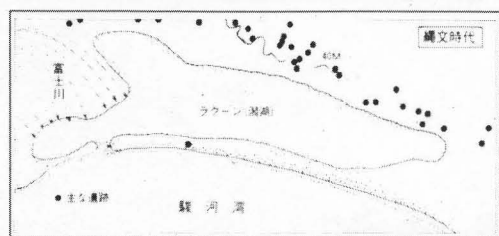
こちらふたりはうなぎのたび

元吉原を通り過ぎ、かしわ橋という所に着いた。ここからは富士の山が真正面に見られる。海道一の絶景である。】

駄洒落をきかした歌の数々。文間に旅籠中に漂う蒲焼の匂いまで連想できるではないか。広沼の痕跡を探しながら「弥次喜多」風に珍道中のつもりになり、うなぎの蒲焼で一献傾けるのも一興かと考える次第である。

（おおぬま あきら・マネー&キャリアマネジメントアドバイザー）

浮島沼のうつりかわり



富士市立博物館刊「浮島沼と米づくり」より

法隆寺絵図余話

柏木隆雄

連載中の「柏木家に残された忠敬資料」の中で記述した「法隆寺境内之図」(前号三八、三九頁)。この検証のため六月二十二日に法隆寺の寺務所を訪ねた。事前に寺側から、文書での質疑への回答書を受領していたが、絵図の製作年代にまだ疑問が残ったので、そのことを記述した本誌五六号と、忠敬『測量日記』の写し、忠敬が持ち帰った『法隆寺霊宝録』、伊能大図の内、法隆寺周辺部分を持参した。

寺務所では執事の大野正法氏(菅長・大野玄妙氏の令弟)が応待して下さった。もの静かな方で、ていねいな言葉遣いに恐縮した。忠敬の功績を讃えられ、法隆寺に足跡を残した証となる『日記』『絵図』『霊宝録』等に改めて興味と関心を示された。

寺側で古文書を調べたところ、文化五年十二月一日に、測量方が法隆寺を訪ねた、その記載があるというお話があったので、ぜひその箇所(正確な記述の写しが欲しい、と改めて願い出た。いずれ入手できるものと期待している)。

その日、回廊内の五重塔、金堂、講堂の在処する黄金エリアは修学旅行生で大混雑。霊宝拝観の雰囲気ではなかったので、桂昌院(寄贈の燈籠のみ、つぶさに観察した。前号で金銅製と書いたが、青銅製の誤り。葵の御紋が浮き彫りされた想像以上に堂々としたもの)。

境内の雑踏をよそに、寺務所の佇いは静寂で、中庭からの五重塔の

望景は格別なものであった。

さて、絵図製作年代の検証は、最初の寺側の回答では、幕末から明治にかけてのものであったが、改められ、やはり忠敬が受領した文化五年以前のものではあるという事になった。後日届いた法隆寺の大野正法氏からの書翰の中では次のように述べられている。

「当方の研究不足から間違えた所感を申し上げるなど、かえってご迷惑をおかけ致しましたにもかかわらず、沢山の史料、また御来山の折のお写真等をご送付賜り有難く存じております。賜りました資料は、法隆寺史の編さんに活用させていただきたいと考えております。」

—合掌—

(かしわざ たかお・税理士・作詞家)



法隆寺五重塔と桂昌院寄進の燈籠

芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

伊能陽子

守屋 源次郎

もりや げんじろう

A 政治家（一八七七〜一九三九）

第二六代茨城県知事（大正十年〜十二年）

政友会一辺倒の暴君といわれた。

『近現代日本政治関係人物文献目録』

B 学者（？　？　？）

一九〇九年五月「社会政策学会第二回大会」の講演者

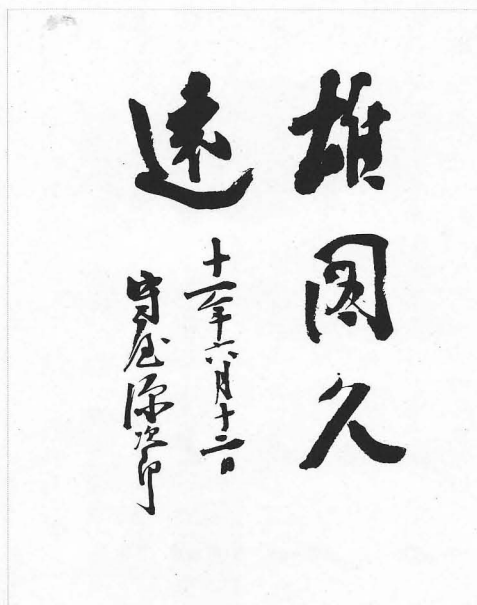
に前長崎高等商業学校教授としてその名がある。演題は

「現代の婦人と其教育」。同じプログラムに建部遯吾の名

が並んでいる。彼は三八号の芳名録で紹介したように、大

正十年に佐原においてになっている。

『社会政策学会史料集』



雄 遠

十一年六月十二日

守屋源次郎

今回も同姓同名に悩まされた。Aの場合、地理的なご縁とも考えたが、まさに知事在職中である。肩書きを書かれるのが自然ではないかと。私は守屋Bさんと思いたいのですが。

先生之風
山高水長
小林一郎

先生之風
山高水長

大正十三年三月
小林一郎

小林 一郎

こばやし いちろう (一八七六—一九四四)

『日本著者名・人名典拠録』に「小林一郎サン」がずらりと並んでいる。大正十三年(一九二四)に佐原においてなられる可能性は、生年月日で選ぶしかない。宗教家の小林一郎氏を紹介しておく。

開成中学、一高と常に首席の成績で、さらに東京帝大文学部に進み西欧哲学を専攻する。卒業後、請われて東京帝大で教鞭をとるが、あるきっかけから、懇請されて日蓮宗大学(現立正大学)へ奉職、日蓮宗との縁が結ばれる。昭和十年から『法華経大講座』の執筆開始、昭和十二年全十二巻が刊行される。

(日蓮宗ポータルサイトより)

(いのう ようこ・伊能忠敬研究会顧問)

伊能忠敬、関西旅行の旅先で

方位や緯度測定

佐久間 達夫

伊能忠敬は、隠居する前年の寛政五年（一七九三）二月末に佐原を出立し、伊勢神宮と関西方面の旅に出た。忠敬四十九歳の時である。この旅の同行者は、親類の伊能平右衛門、伊能七左衛門辰英（帯刀）、伊能為右衛門、それに久保木深四郎、石井市郎右衛門、天満屋兵十、菊右衛門、茂八、津宮村の畏友・久保木清淵（三二歳）の十人である。

関西旅行記の表紙
伊能忠敬記念館所蔵



寛政五年二月二十八日、佐原村を出立し、利根川を船で木下村（現千葉県印西市木下）まで行き、ここで一泊し、翌朝暁に木下を出て、七ツ頃江戸に着。

二月晦日、佐原村領主津田日向守信之の江戸宅に旅立ちの挨拶をし、

続いて三月朔日、義父桑原隆朝、隆朝の妹の夫・工藤平助を訪問する。

三月四日、江戸小網町（現東京都中央区日本橋小網町）を一同発足し、東海道沿いの名所旧跡を訪ねて、三月二十二日伊勢着。翌日、伊勢太々神楽修行、並びに参宮を済ませ、奈良、吉野、高野山、和歌の浦、大坂、京都の神社寺院などを見学する。京都からは、大阪、尼崎、西宮、兵庫、明石を経て高砂に至る。ここから船に乗り四国の金比羅宮を参詣しようと思ったが、風向きが逆で、そのうえ波が荒かったので、やむなく播磨國の坂越（現兵庫県赤穂市）の湊に上陸した。

帰路は、坂越から大坂へ出て、船で宇治に至り、京都を見学し、比叡山の麓の八瀬村に五月十五日に宿泊する。

「関西旅行記」は、ここで終わっているが、推測すると、当初旅行記は上・下の二冊あったが、下の一冊は欠損したのではなからうか。

この旅行で伊能忠敬は、宿駅間の距離をメモし、忠敬自身が方位盤や磁石、象限儀を持参し、各地の方位と緯度を測定し、その値を書き留めている。このことから忠敬は、佐原時代に既に測量術を学び、ある程度実地に測量できるようになっていたことがわかる。それを裏づける資料として、寛政六年の春に、佐原村の利根川沿いの粉名口付近を実測した地図（「伊能忠敬研究第四二号」筆者記）や、寛政七年五月に江戸深川黒江町に住居し、高橋至時の門下生になってから作成したと思われる黒江町の自宅から浅草の司天台までの測量図（「伊能忠敬研究第一六号・一七号」永野達代記）などがある。「佐原村粉名口付近実測図」と「江戸宅から司天台までの測量図」の記述事項はほぼ同じである。

● 地図・日記に記されている測定値の使用単位

・関西旅行記

距離の使用単位 (里 町 五厘)

方位の使用単位 (十二支 一分〃十分 五厘)

・佐原村実測図

距離の使用単位 (半間、一間〃五二間)

方位の使用単位 (十二支 一分〃十分)

・江戸測量図

距離の使用単位 (間 〇、六六間 〇、三三間)

方位の使用単位 (十二支 初(〇)〃九分)

また、旅行記には、通過した土地の名所旧跡などの描写が、細部にわたって記述されている。このことから忠敬は、文学的・歴史的なものにも興味関心が強かったように推測できる。

次に「関西旅行記」に記されている、方位と緯度について記してみよう。

資料一 関西旅行時の方位と緯度測定 (寛政五年)

月 日	観測地点	観測地物	方位・緯度
三月 七日	箱根榎ノ木坂	大磯酒匂川	戌七分
三月 九日	静岡県久能山 静岡県久能山 駿府の宿	伊豆御嶽山 御前崎岬の弁天 北極出地度	巳五分 未八分 三五度弱

三月二二日	二見浦 二見浦 二見浦 二見浦 二見浦	尾州モロ崎 尾州宮(熱田) 志州遠瀬 三州五十子崎 志州鳥羽	丑二分 亥十分 寅十分 寅七分 卯七分
四月八日	多武峰 多武峰	北極出地度 二上山	三五度弱 西六分
四月九日	吉野曾遠観音	多武峰	子五分
四月一六日	堺湊町前 堺大和橋 堺大和橋	二上山 信貴山 京都	卯六分 寅五分 丑五分
四月一八日	大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社 大坂高津社	六甲山頭 甲山 摩耶山 鉄拐峰 高取 阿波嶋北 阿波嶋南 紀州苦嶋 池田伊丹 京都 丹波篠山	酉八分 戌二分 酉三分 申九分 酉一分 申九分 申六分半 未六分五厘 亥二分 子七分 子二分五厘

四月一八日	大湊ズイケン山 大湊ズイケン山 大湊ズイケン山	天王寺 甲山 池田	辰一分 戌五分 亥十分
四月二四日	京都清水観音	大坂	未一分
四月二六日	摩耶山八九分 摩耶山八九分 摩耶山八九分 摩耶山八九分 摩耶山八九分 摩耶山八九分 摩耶山八九分 摩耶山頂上より 摩耶山八九分 摩耶山八九分 摩耶山八九分 摩耶山八九分	苦嶋 加田 淡路 岸和田 吉野 大坂 大坂 二上山 葛城 金剛山 住吉	午三分 午一分五厘 午八分 巳三分 卯五分 寅九分 卯九分 卯六分 辰一分 辰二分半 卯二分
四月二八日	高砂相生社 高砂相生社 高砂相生社	舞嶋 小豆嶋 クラ掛嶋	未二分 申二分 申一分五厘
五月朔日	酒越（坂越） 姫路書写山 姫路書写山	小豆嶋 淡路島 小豆嶋	巳六分五厘 辰二分 午八分

※ 注釈

駿府（静岡県静岡市）

五十子崎（愛知県田原市伊良湖崎）

多武峰（奈良県桜井市）

二上山（大阪市太子町）

信貴山（奈良県平群町）

大坂高津社（大阪府南区高津神社）

摩耶山（神戸市摩耶山）

金剛山（神戸市金剛山）

坂越（兵庫県赤穂市坂越）

姫路書写山（姫路市書写山）

クラ掛（兵庫県姫路市家島・クラ掛島）

資料二

関西旅行記

解説

香取五郎氏

原本

伊能忠敬記念館所蔵

安永年中、伊勢神廟へ太々講なるものを催し、年を経て成就しけれど、凶年おけるまま延引し、此春会談し、両春に修行せんと、連衆を兩年にわけ。一組は、寛政五丑年二月二十八日、我里を出立ぬれば、党も同日朝五ツ後乗船しける。順風なりけるゆえ、其昼の七ツ頃木下（きおろし）の岸へ着。

二月二十九日 暁出立、七ツ江都へ着。

（以下中省略）

三月九日 蒲原より由比江一里なり。右に古城跡有、北条新三郎籠しを信玄攻め落せし城なり。由井より興津江二里十二町なり。由井鴨長明は、湯居と云う風土記には紬伊と記せり。今は由比と書く。宿の出口に由比川あり。少しの流れなれど、大雨には渡がたしと云わせ川泉川有、橋あり。

田子の浦、蒲原より江尻までの間、三保の入江興津の辺、みな田子の浦なるよし絶景也。

薩埵山の上に地藏堂有。別当は東勝院。寺領十六石八斗、地藏あるにより薩埵山と云う。

足利尊氏と弟直義との合戦有し所なり。此処に下道、中道、上道の三道有。下道は、親しらず子しらずとて波打ち寄する岩間伝の難所なり。今も塩干に人馬共に通る中道は、明暦元年朝鮮人來朝の節開かれ、即、今往来する道なり。此峠より田子の入海、三保の松原、袖しの浦見ゆる。山上に古城跡あり。永禄年中、今川勢籠りしを、馬場美濃守攻め落とせし城なり。此辺の浜をこぬみの浜とて名所也。此辺より薩埵海苔出る。薩埵山の前を東倉沢、西倉沢と云う。あわび、さざえの貝焼名物也。

興津、此所より身延へ道有。此所は清見潟也。左は清見が関とて関有し所なり。往古、奥州より阿部の高丸、此所まで攻め上り、坂上の田村丸に戦いまけて逃げ帰りし処にて、天慶三年、将門征伐の時、藤原忠文大將軍にて、此清見が関に陣をはりしに、此処、海道一の絶景眺望すぐれたるを軍監清原滋藤とりあえず、

漁舟火影冷焼波

駅路鈴声夜遍山

(遍は過誤)

綴しかば、折から優に聞えて、皆人興を添けるとなり。

清見寺巨龍山求玉院と号す。寺領二百石。聖一国師の弟子開精禪師の開基なり。座敷の画、雪舟の龍虎なり。寺の脇に清見が関の跡有る。庭二十七間の這桜有る。庭の眺望絶景なり。三保の松原眼前に見える。門の前、町に古より膏藥を売る店あり、興津川折りふし水増ければ、台越しはと打川左の磯を袖し浦と云う。風土記に久能浦より三保クレハの社の前迄を有渡の浜と云う。

興津より一里二町を経て江尻に至る町中に稚児橋有る。少し行けば左の方清水町あり。繁昌なるよし。公儀の御蔵あり。此所より三穂へ

行く。海上一里といえ共、漸く二十町ばかりなり。夫より久能へ分る。道法三里なり。追分より一里半程行て馬越し村富士見橋と云う有り。古の橋所にはあらず、古の橋跡より富士山を眺望すれば、足高山、浮島が原、三保の松原、扇面の如く見える。

それより久能山へ参詣しけれ共、拝見不叶、宗門の際迄登ること十町、石階十八曲、遠江潮見える。

伊豆の御嶽山、巳ノ五分に当る。

駿河より海へ成出したる岬の弁天、未ノ八分に当る。久能を出て暫時海辺砂地なり。府中江出る道路三里、府中の前にて富士山見ゆる、景色よし。八幡村云う所に八幡宮あり。駿府の宿甲州屋太兵衛と云う。

此地は北極出地三五度弱に当る。(以下中省略)

五月十五日 四条(京都) 旅宿出る。(略)

僧正谷を下りて対面堂と云う。僧正房。義経対面所也。本尊伝教大師作也。義経七歳背競石。坂を上りて左方毘沙門堂は大堂なり。千手觀音堂、薬師堂、二重塔、靈宝、魔王大僧正、左役行者、右義経、狩野古法眼筆。義経鎧、延宝年中大坂城代板倉伊予守御修復。義経の岩切丸、長四尺三寸。弁慶刀五尺三寸。弁慶富樫関を越錫杖。坂を八町下りて義経守本尊川上地藏堂、楼門額鞍馬寺とあり。鞍馬より八瀬へ百八町、峠上り下り一五、六町大難所。秋葉村、大原村を越え八瀬村に至る。豆腐屋長左衛門に止宿。本村は遙か脇、二百軒も有ると云う。即、比叡山の禁なり。(終)

これまで伊能忠敬自筆の「関西旅行記」のなかから、方位と北極出地度(緯度)に関係した事項を中心にしたが、忠敬と天文曆学・測量術との関係について記述してみよう。

資料三

伊能忠敬と天文暦学・測量術との関係

西 暦	年 号	年 齢	こ と が ら
一七七八	安永 七	三四	・妻ミチと奥州松島方面に旅し、「奥州紀行」を記す。 旅先の寺社や石碑などに記されていた古歌や宿駅間の里程（距離）を書き留める。
一七八一	天明 元	三七	・本宿組名主となり、洪水によって埋没した田畑の測量や地図の作成をする（「旌門金鏡類録」）。 佐原村新宿の絵図、佐原村本宿の新宿の淵岸田の測量と地図の作成。
一七八四	天明 四	四〇	・本宿名主をやめ、村方後見となる（伊能家家牒）

※寛政十二年四月五日付、蝦夷地測量の幕府への請願書「蝦夷于役志啓行策略」に、

前々より天文暦学地図等相学び候所、六か年以前、高橋作左衛門儀御用に付、罷下り候節より門弟に罷成、天文暦学出精仕候と記してある。

忠敬が隠居して江戸に出る前に長男が作成した「書籍目録」に、天文暦学や数学・測量の図書が記載されている。

一七九二	寛政 四	四八	・長女の夫に、「古暦便覧」「暦算啓蒙」などの暦書購入を依頼している（伊能忠敬文書「伊能忠敬記念館所蔵」）。
一七九三	寛政 五	四九	・二月、親類知人と伊勢、奈良、吉野、大坂、京都などを見学し、「関西旅行記」を記す。旅先で見聞した古歌などを記述。遠望できる地点の方位や緯度の測定と記述。
一七九四	寛政 六	五〇	・十二月、家督を長男に譲り、隠居する（「伊能家家牒」） ・春、佐原村粉名口付近を実測し、地図を作成する（佐原村粉名口付近図）
一七九五	寛政 七	五一	・五月、江戸深川黒江町に居住し、高橋至時の門下生になる。 「江戸宅から司天台までの測量図」を作成する（江戸宅から司天台迄の測量図）
一八〇〇	寛政一二	五六	第一次測量をし、蝦夷地南部と奥州街道の実測図を作成する。（「測量日記」伊能忠敬記念館所蔵）。

前記したように伊能忠敬は、佐原村で名主や村方後見をしていたとき、職務上、ある程度測量技術や地図作成の知識技能を習得した。その確かめとして、寛政五年の関西旅行に簡単な測量器具を持参し、遠望できる地点の方位や緯度の測定をし、翌年（寛政六年）十二月、隠居した年の春に、佐原の村外れの利根川の堤防沿いの粉名口付近で測量の練習をし、それを地図にあらわした。

それによって忠敬は、ある程度自信がつき、將軍の膝元である江戸に居住し、「黒江町浅草測量図」の作成へと発展していったように思われる。

このことから忠敬の第二の人生のライフワークを決定づけるのに、寛政五年の関西旅行は、重要な意義をもっていたと推測される。

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）

早稲田大学「古地図で眺める朝鮮半島」

— 嶺南大学校博物館地図コレクションより —

◇早稲田大学會津八一記念博物館 一階企画展示室 入場無料

二〇〇九年十一月二十四日（火）～十二月十九日（土）

◇會津八一記念博物館は二〇〇八年に韓国大邱にある嶺南大学校博物館と箇所間協定を結びました。これを記念する交換展として、嶺南大学校博物館が所蔵する韓半島の近世から近代に至る古地図約六〇点を展示いたします。 ☎03・5286・38835

◇「旧富岡美術館の近代画」富岡鉄斎・橋本雅邦・矢部友衛ほか
十一月二十八日～ 富岡コレクション展示室（当館ホール奥）

七タのマコモ馬

江口 俊子

平成二〇年、このマコモ馬を作って下さった加瀬きよさん八七歳は、病をおして制作された三ヶ月後に亡くなりました。

七タのマコモ馬は、他の地域ではカヤカヤ馬とも呼ばれ、千葉県各地に行事としていろいろな風習があったようですが、私はきよさんから聞きた、この地、山武市横田に限定してのマコモ馬の由来をお伝えします。

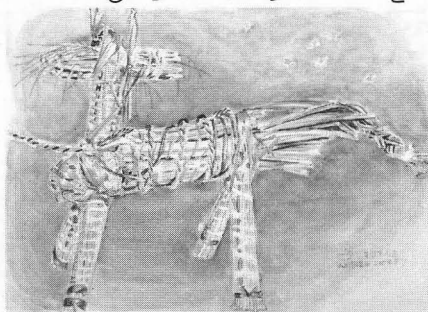
月遅れのお盆の八月七日早朝五時前にマコモ馬を近くの境川に連れて行きます。マコモ馬には畦で刈ったばかりのヒエなどの草を背負わせます。川ではマコモ馬を洗い、人々は髪を洗います。これは脳卒中など頭の病いにならないための願いからだそうです。

小川から連れ帰ったマコモ馬は七タのお飾りのもとに置かれます。七タのお飾りには、小麦粉で作った蒸かしまんじゅうが必ず供えられました。

役目を終えたマコモ馬・牛（マコモで作る）は、翌日、屋根に投げ上げ、七タ飾りの竹笹は川に流されました。

昭和三十八、九年、東京オリンピック前頃までこの行事はありましたが、今はマコモ馬を作られる方も少なく、私はきよさんに貴重なマコモ馬を作っていただき、記録として絵に描けましたことを感謝しております。

（えぐち としこ・主婦、油絵）



七タ マコモの馬 山武郡横田 2008. 8. 7

伊能忠敬の見た風景（その一）

石谷 春香

第八章 伊能忠敬の見た風景

一 伊能忠敬への挑戦

伊能忠敬は二十四日間かけて神奈川県を歩きました。その一日目を私は同じように歩きました。しかし残りの二十三日間も同じように歩くのはとてもできません。

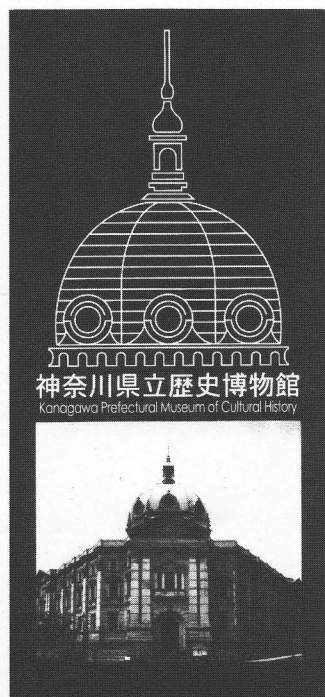
ところで私が現在使っている自転車は小学生のときのもので、もう古くなってしまいました。私は前から新しく自転車を買おうと思っていました。湯河原で自転車を買って、自宅のある川崎まで走ってみようと思いました。そうすれば伊能忠敬の歩いたコースとは逆になりますが、私も神奈川県を歩くことになります。湯河原を出発して六日間かけて自宅に帰る計画です。

実はこの計画は一番最初に考えたことです。私は自転車に乗っていないのが好きです。前に鎌倉まで行ったこともあります。でもこんなに一度に走るのは初めてです。ちよつと心配ですが行ってみようと思います。それから準備しなければならぬこともたくさんあります。

伊能忠敬への挑戦です！

二 神奈川県を調べる

神奈川県のことをいろいろ調べるのに横浜に行きました。私はまず、歴史博物館に行ってみました。



① 神奈川県立歴史博物館

神奈川県横浜市中区南仲通五―六〇

〇四五―二〇一―〇九二六

中学生の入場は無料です。中に入るとまず三階に行きます。最初に古代のものが展示してあります。それから鎌倉の町が大きく展示してあります。建長寺や円覚寺、長谷寺、高德院など知っている名前がありました。お寺の中みたいなどころがあり、ちよつと怖かったです。それから横浜の事や、昔の船などが展示してありました。一階のおみやげで絵はがきや地図などを買いました。次にながわ屋に行きました。

② 観光プラザ「かながわ屋」

神奈川県横浜市中区山下町一 〇四五―六六二―四一―一三

ここには神奈川県のお土産やパンフレットがたくさん置いてあります。わたしは鎌倉や横浜それから行くところのパンフレットを全部もらいました。バッグにいっぱいになってしまいました。重い……。それから山下公園にいったちよつと休みました。とてもいい天気です。次に中央図書館に行きました。

③ 中央図書館

神奈川県横浜市中区老松町一

○四五―二六二―〇〇五〇

ところがその日は野毛大道芸の日で人がとてもたくさんいました。

この図書館はこれまでに何回か来ているなことを調べました。

パソコンで調べて本を探します。伊能忠

敬の新しい本があります。『伊能大図総覧』です。とても大きな本で一人ではもてないぐらい重いです。一冊ずつ席にもって行き

ました。この本には伊能図の大図が全部あります。私は神奈川のとこ
ろだけコピーしました。

コピー機は下の階にあるので重いですが運びました。コピーするの
も大変でした。それからいろいろな本を見ました。

外に出ると通りに人がたくさんいます。みんな大道芸を見ています。
私も見ようと思ったのですが、背が低くてよく見えませんでした。バ

ルーンを作る人のところはあまり人がいなかったもので、しばらく見ま
した。おなががすいてきたのでモスバーガーで食べました。次に横浜
市営地下鉄に乗ってセンター北駅に行きました。

④ 横浜市歴史博物館

神奈川県横浜市中区中川中央一―一八―一

○四五―九二―七七七七

駅を降りると人がたくさんいます。今日、ノースポートというショ
ッピングセンターがオープンする日だったので。私はまず歴史博物
館に行きました。中学生の入場は無料です。二階に展示室があります。



展示室は丸くなっていて古代から現代までのものが展示してあります。
鎌倉街道も展示してありました。まんなかにあるパソコンも少し見ま
した。一階のおみやげで絵はがきや地図を買いました。それからすぐ
近くでできたノースポートに行きました。ひとがとても混雑していま
す。雑貨のお店などたくさん見ました。サティーンワンに入ろうとし
たのですが、人がたくさん並んでいたのでやめました。とても疲れま
した。

三 事前準備

横浜に行って集めたパンフレットなどを整理しました。次に行くところの地図を調べました。そして地図をコピーしてつなげました。

コピーはたくさんして、とても大変でした。

できた地図はとても大きく、本当に行けるのかとても心配になってきました。でもがんばってみます。

五月になって泊まるところの予約

をしました。

一日目 鴨宮ステーションホテル

二日目 江ノ島民宿「海上亭」

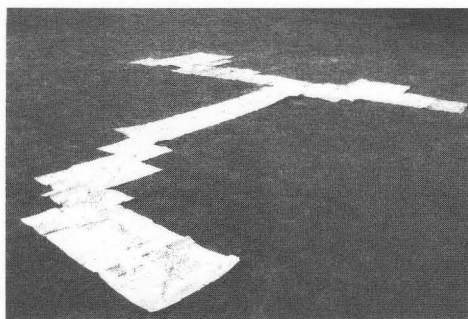
三日目 城ヶ島民宿「港屋」

四日目 八景島「ホテルシーパラダイス」

五日目 横浜ランドマーク「横浜ロイヤルパークホテル」

ルパークホテル」

なんだかすごいことになってきた
ような気がします。



今年の夏はとても暑そうなので、日射病には注意します。
それからルールもきめました

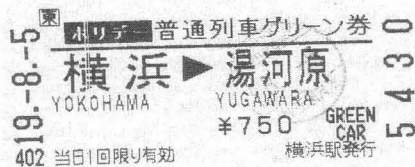
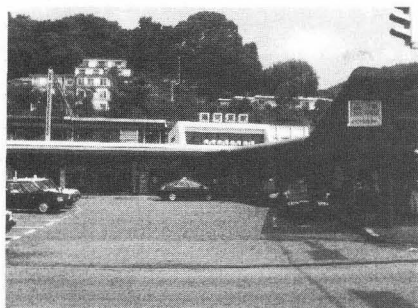
ルールその一 交通安全
ルールその二 無理をしない
ルールその三 あきらめない

長い長い道ですが、行ってみます！

四 出発！

一日目 八月六日 晴れ

家を七時三〇分に出発。バスに乗って、東急東横線元住吉駅に行きます。そこから横浜駅に行きます。駅で朝食を買いいます。JR東海道本線に乗り換えます。グリーン車に乗ります。



ゆっくり朝食を食べます。湯河原駅に九時三〇分ごろに着きました。行きは家から二時間です。帰りはどのくらいかかるのでしょうか。

五 湯河原町

湯河原町は温泉として有名な町です。タクシーがたくさん並んでいます。

駅前のおみやげ屋で、さっそくおみやげを見ます。そこからタクシーでエスポットモールというところに行きます。お店は開店まであと一〇分ぐらいです。

お店の横の駐車場に行くと真鶴半島が見えます。遠そうです。

一〇時にオープンと同時にお店に入ります。

けっこう人がいます。なんでみんなこんなに早く買い物に来るのでしょうか。お店の一番奥に自転車売っています。26型の自転車を選びました。それから走った距離がわかるメーターも付けました。お店の人に住所が川崎と言うとびっくりしていました。自転車を組み立てるまで時間があるのでペストショップを見ました。

ようやく自転車ができました。すぐに外に出ます。近くの海浜公園で用意をします。そしてスタート地点の千歳橋に行きます。





千歳橋は静岡県熱海市と神奈川県湯河原町の境を流れる千歳川にかかる橋です。橋は普通の橋です。

道路の標識をみると向こう側は静岡県熱海市になっています。

ここが神奈川県の一歩はしつこになります。

それでは家に帰ります。じゃなくてスタートです!!!



自転車はけっこういいです。道路の右側を走っていきます。すると吉浜橋で歩道がいきなり行き止まりになってしまいました。

反対側に行くため、少しもどりました。少し行くと坂道になります。

わりをしないで自転車を押していきます。後ろを見ると海水浴場に人がたくさんいます。

六 真鶴町

真鶴道路を進み、真鶴駅の近くを通ります。セブンイレブンによって水を買います。真鶴には真鶴半島があります。真鶴は「かながわの未来遺産一〇〇」に選ばれています。道が分かれています。

右のぼりの道を進みます。



ちょっと休んでいてなにげなくバス停の時刻表を見ると一日二本しかバスが走っていないようです。

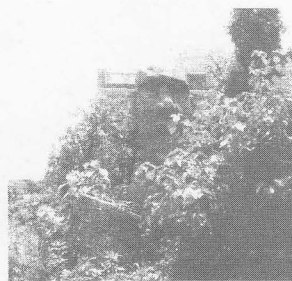
急な坂を上るととても景色がよくなります。





三つ石は干潮時には陸続きとなります。
 ケープ真鶴で一休みです。
 カキ氷を食べました。
 また出発です。

そしてケープ真鶴につきます。真鶴半島
 の一番先端です。
 真鶴岬は「かながわの景勝五〇選」に
 選ばれています。

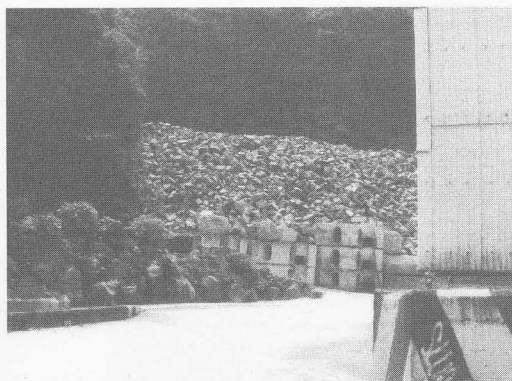


海が見えてきます。
 モアイ像がなぜかあります。
 海がとてもきれいです。

中川一政美術館のところを右に曲がります。
 すると急に森のようになります。



少し行っただころで急な下り坂になりました。
 海岸まで一気にいきます。
 石がとてもたくさん積んであるところがあります。



神奈川県立自然公園

真鶴の歴史・文化・自然をめぐる

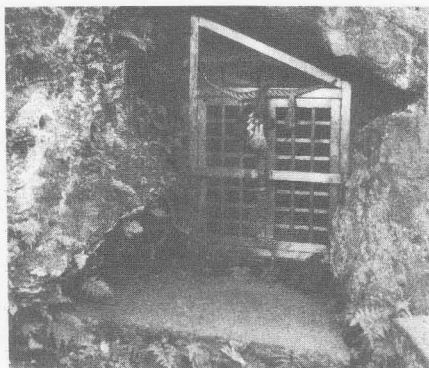
真鶴さんぽ



貴船神社の前行きます。
貴船神社の「貴船まつり」は豊漁
を祈る海上のお祭りとして「かな
がわの未来遺産一〇〇」に選ばれ
ています。



ながい上り坂が続きます。
自転車をおしてようやくさっきの
分かれ道のところへもどります。
そしてJRの真鶴駅にもどりました。
こんどは細い歩道を走って行きます。



しとじ いわや
鴟の窟があります。源頼朝
が戦いに敗れて逃げてかくれ
ていたところです。



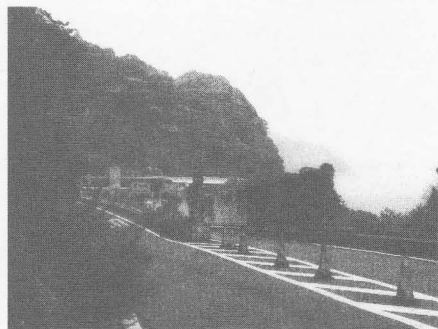
トンネルを通ります。そして料金
所に着きます。料金所では自動車
がたくさん通っていてなかなか料金所
まで行けません。ようやく自動車
がいなくなつて自転車の料金の一台二
〇円を払います。道路から見える海
の景色がとてもきれいです。
道は自転車の通れるところはとも
せまく、それから自動車は思いつき
り走ってくるのでとても危ないです。

七 小田原町

江の浦港というバス停でちょっと休けいです。
少し行くとドライブインみや新島というところがあります。
ここでお昼を食べることにしました。

一階にはおみやげが売っていて、
二階がレストランになっています。
天ざるそばを食べました。えびの天ぶ
らがとても大きくおいしかったです。

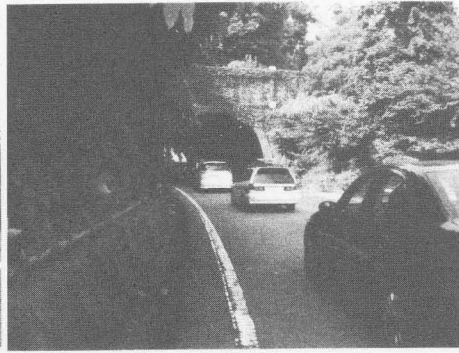
新白糸橋を渡ります。



料金所



なるべく左によって行きます。
少し行くと真鶴道路が終わります。



道路の左側を走って行きます。
上り坂になります。

少し行くと車もいなくなり
なんだか寂しいところにな
っていきます。



石橋山古戦場跡という看板が
あります。

石橋山古戦場跡は源頼朝が
一一八〇（治承四年）に平
家とうばつの旗揚げをした
所です。

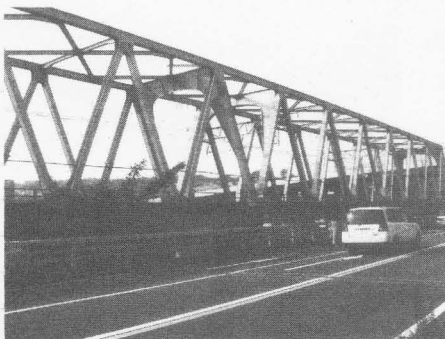
しかしここで道を間違えて
いることに気がつきました。

本当なら下の道を行かなければいけないのです。
引き返すよりこのまま進めばとの道に合流するようなので、そのま
ま行くことにします。

すこし行くと下の道に出られ
ました。進みます。

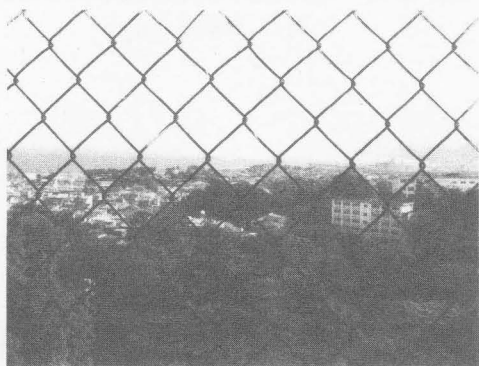
道路の標識に小田原とでています。
右に小田原ブルーウェイブリッジ
があります。

早川の新早川橋を通ります。



新早川橋





城山トンネルとぬけると小田原城です。駐輪場で自転車を止めました。歩いて上に行きます。小田原城が見えましたがまず、カキ氷です。ベンチで食べて休けいです。

小田原城は十五世紀中ごろ築城されました。一四九五（明応四）年、北条早雲が入城して以来、五代九十六年にわたって栄えました。「かながわの景勝五〇選」「かながわの建築物一〇〇選」「かながわのまちなみ一〇〇選」「かながわの未来遺産一〇〇」に選ばれています。入場料は一五〇円です。小田原城に入って階段で上まで行きます。階段がちよつときついです。上では走ってきた真鶴半島が見えます。それからこれから行く三浦半島も見えます。



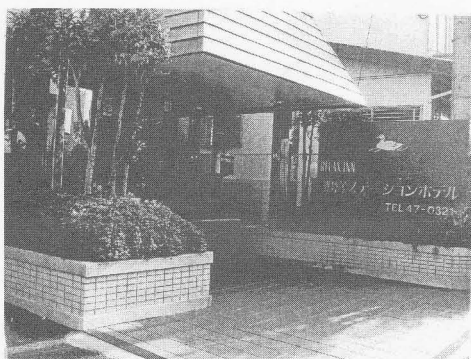
おみやげを買います。下の公園にはさるなどがいました。また走ります。小田原駅です。



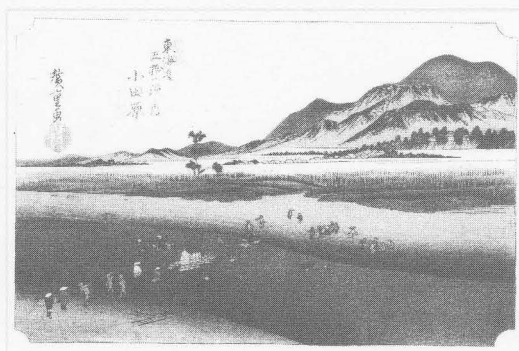
そして酒匂川の小田原大橋を渡ります。



鴨宮ステーションホテル



酒匂川 小田原大橋



広重画「東海道五拾三次之内 小田原（酒匂川）」

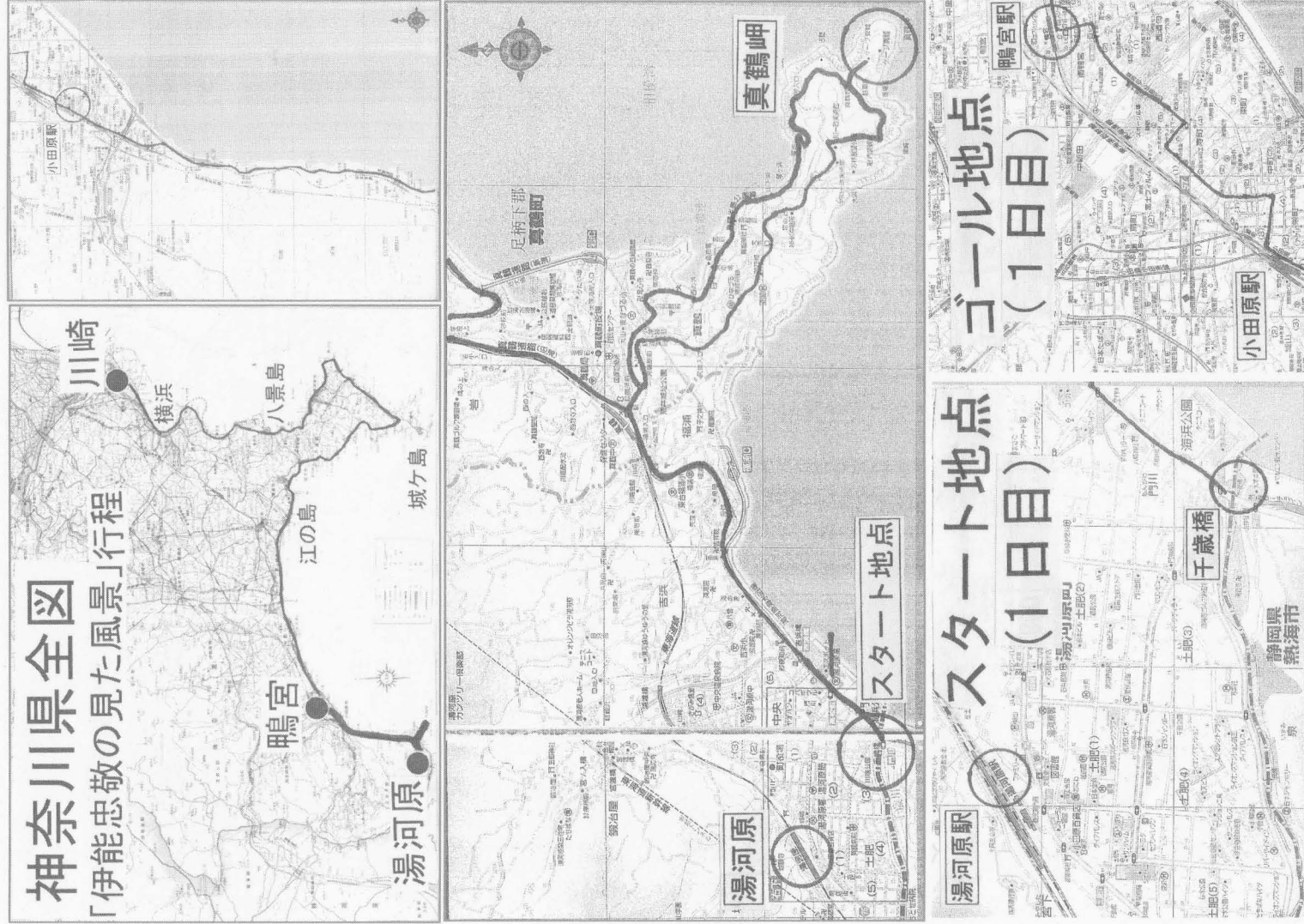
しばらく走ってようやく鴨宮駅に着きました。
五時一〇分、泊まる予定の鴨宮ステーションホテルに着きました。

ホテルで自転車はどこに止めればいいですかと聞くと、「どこからきたのですか」と聞かれました。湯河原から来たと言うと、びっくりして「真鶴道路は危なくなかったですか」と聞かれました。

少し休んで、歩いてコンビニまで行き、夕食を買って部屋で食べました。夜にもう一度コンビニに行きました。今日一日で、けっこう日に焼けました。一日は無事、終わりました。

つづく

(いしやはるか・文科大学付属高等学校一年)





きらいこう

鬼来迎——忠敬さんも見た？地獄劇——

江口俊子

この絵は平成十九年富岡八幡宮で伊能研の例会がありました帰り際横芝光町在住の神保弘之氏、海保英之氏から鬼来迎のお話を伺い、描きました。

同年の八月十六日、千葉県山武郡横芝光町虫生にある広済寺に行きました。あたりは少し色づいた田んぼがあり、こじんまりとした落ち着いた部落でした。鬼来迎は盆の仏教劇で、地獄界、極楽の因果応報を説くものです。劇は屋外で行われ、竹や杉、その他の木々をふんだんに使った野趣に富んだ舞台です。演目に登場する閻魔大王、赤鬼、黒鬼などの単純で力強い所作の繰り返し面白く、いつの時代にも人々に分かりやすい説教ではなかったかと思えます。

鬼来迎の劇の後には赤ん坊、幼児の虫封じが行われ、地獄の鬼婆が子供を抱きます。こわい鬼婆に抱かれた子供の泣き声が続々と境内にこだまし、見物客を大いに楽しませてくれました。

鎌倉時代（約八〇〇年前）から上演されている鬼来迎。伊能忠敬さんはこの行事をご覧になられたかもしれませんがね。

（えぐち としこ・主婦、油絵）

【編集部】鬼来迎は伊能忠敬の父・神保貞恒の実家がある小堤にほど近い虫生の広済寺で毎年旧盆八月十六日に地元民により演じられる。昭和五十一年（一九七五）、国の重要無形民俗文化財に指定された。

（資料・横芝光町HP）

柏木家に残された忠敬資料(三)

柏木 隆雄

江戸開府四〇〇年の記念行事は、東京千代田区を中心に行われた。もうそれから数年が経ったが、お江戸ブームはいっこうに収まらない。

神田神保町界限の大型書店では、どこも「お江戸もの」出版物の特別コーナーを設けている。「江戸学」の検定試験まで行われている。浮世絵版画や江戸古地図の復刻版は売れ筋の一つ。そこで今回は、忠敬資料の内『江戸城御曲輪内図』(資料⑩)を採りあげてみた。

私の事務所(税務と会計)は千代田区猿樂町にある。漱石の出身校の旧錦華小学校(お茶の水小学校)の近く、神保町、駿河台に隣接し、古書店街は目と鼻の先。この地で開業して四〇年が過ぎたが、江戸開府四〇〇年の一〇分の一と考えると半端な年月の経過ではない、その間、仕事の合間に、古書店の書架を図書館のように利用させていた。このシリーズの執筆に、それが大いに役立った。

六・江戸城御曲輪内図

この絵図は御城(本丸・西丸)近くに、整然と大名屋敷が割拠された曲輪内の図である。各屋敷には、大名の姓氏と、敷地の間口、奥行の長さが記入されていて、実測に基づいた図であることを証明している。今にいう公図に等しい。

手描き彩色図(資料⑩)の大きさは(八六×九二cm)。佐倉の国立歴史民俗博物館には折りたたんだ状態で収蔵されている。濠は淡青、土手は緑、区割りの道路は薄茶に色分けされており、余白は僅かに濠の外側の部分しかない。題字、製作年代、作者名、画讀などの記入はない。そのために、いつの時代、誰の絵図なのかの探索に苦労した。

夏休みを利用し、両国の江戸東京博物館内の図書館に通いつめた。

試みた探索の手順

(一)『江戸幕府諸大名名鑑』から絵図に屋敷が記載されている大名を見つけて出す。

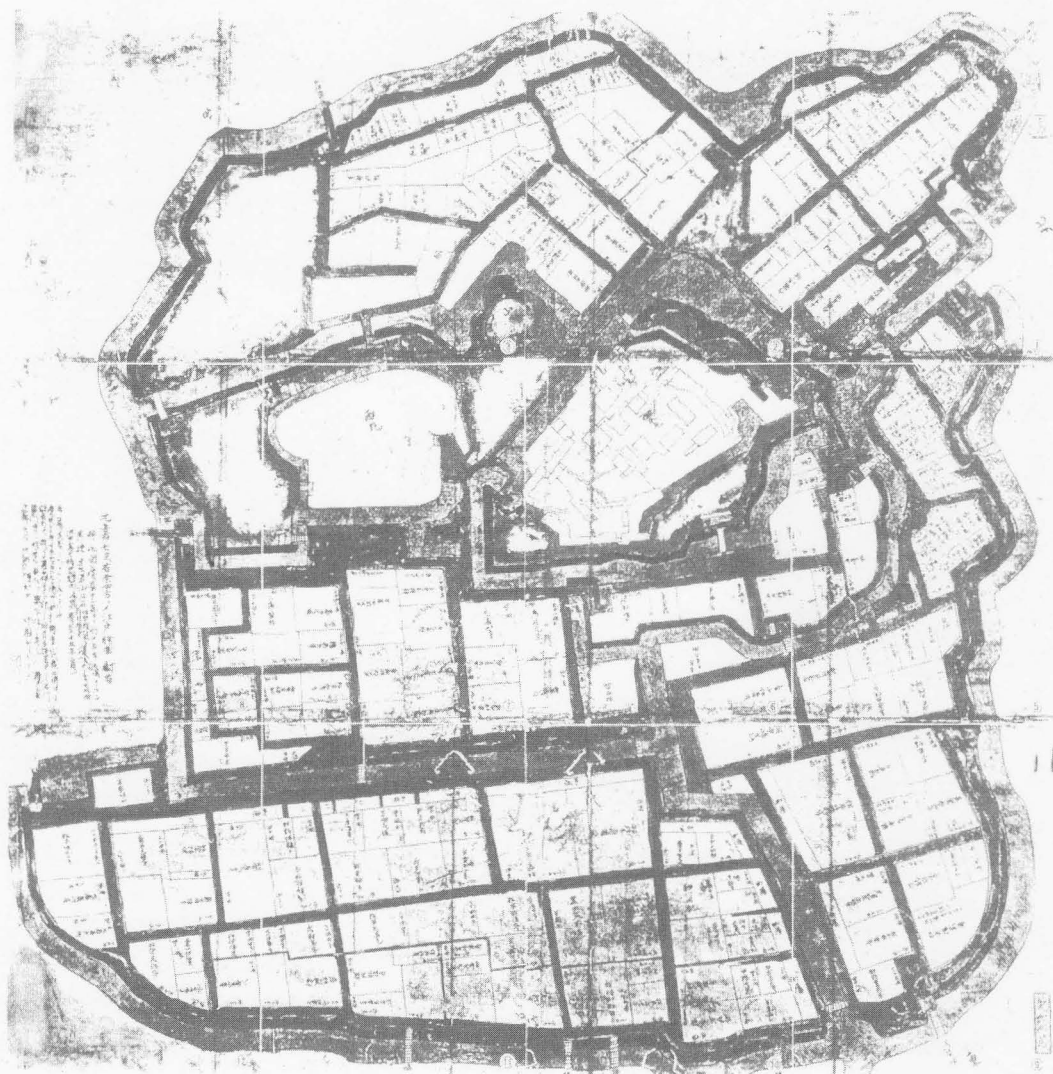
(二)その大名が、いつどこに場所に屋敷を構えたかを『江戸城下武家屋敷図』から探し出す。

(三)『江戸城下変遷絵図』から、年代ごとの区域の屋敷図を見つけて資料の絵図と照合する。

結果的に、これらの組み合わせによる探索は失敗に終わった。というのも、武家屋敷図や城下変遷図に掲載されている大名の姓氏や区域名が古いものでも延宝か元禄以後のもので、それより以前の慶長や元和年代のもの記載がない。私は直感で、この絵図は慶長年代の曲輪内の大名図ではないかと思った。その理由は、本丸の近くに和田倉と濠をはさんで広大な屋敷を構える羽柴飛騨守や蜂須賀阿波守、黒田筑前守の姓氏を見つけたからである。(資料⑪)だが、「羽柴飛騨守」では大名名鑑の記載はなかった。一説によると、慶長十二年から十五年にかけて、豊臣色の払拭のために、諸大名の改姓が行われたようだ。調べてみると、羽柴姓は改姓後、次の大名姓になっている。「池田、上杉、大友、堀、毛利、筒井、立花・・・」飛騨守を名乗る大名を探し出しても屋敷の区域が一致しない。しかし、このような例を挙げるまでもなく、絵図に記載されている屋敷を構える大名姓から「大坂の陣」以前の曲輪内図であろうことは推察できた。



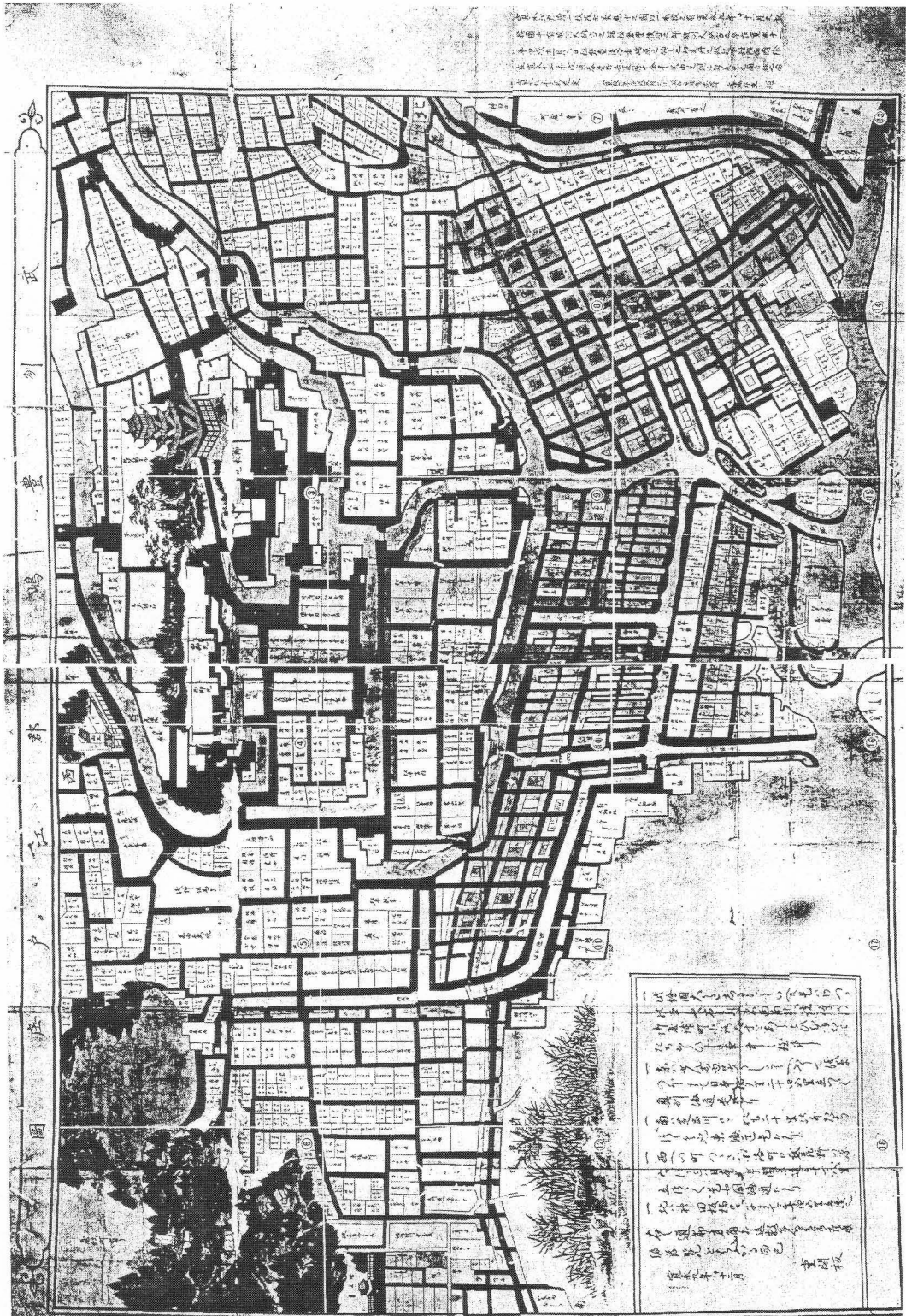
⑪江戸城御曲輪内図（柏木家文書・忠敬資料） 国立歴史民俗博物館蔵



⑫慶長十三年江戸図 「斎藤莞斎」所蔵図



⑬和田蔵付近の大名配置 (⑪「江戸城御曲輪内図」部分)



⑭寛永九年の木版江戸城周辺図 右上に近藤重蔵名の解題

関ヶ原の戦い（一六〇〇年）での没収地は六三二万石、その配分によつて譜代の将が増えられ、江戸幕府の大名配置が確立した。この絵図の大名配置の時点では、まだ大坂城に豊臣秀頼が居り、関ヶ原の戦い以後も江戸在住の豊臣系大名の大坂（秀頼）への伺候の礼は続けられていた。大坂の陣の終結は慶長二〇年（一六一五）、年号も慶長から元和に変わった。

この絵図は慶長年代後期のものと確信を抱いた時に光明が射しこんだ。『古板江戸図集成』に漸くたどりついたのである。以前に一度は手にしたものであるが、その時は寛永以後の木版刷りの江戸図の図録だと思った。再び手にしたのはその第一巻。その中の『武州豊嶋郡江戸庄図』（木板図最初の江戸図）の前の頁に『慶長十三年江戸図』と題して、まさにこの曲輪内絵図が掲載されていた。（資料⑫）手書き図だから内容に多少の違いがある。この絵図には、余白に絵図説明の書き込みがある。また北側の田安土橋（まだ田安門はない）の上に、丸い印影と圖の一字印。東の右下隅には「荳斎藏」の判印があった。大名屋敷の姓氏の文字は不揃いで、よく似ているが、忠敬資料の絵図（資料⑪）の方が整った記入で見易い。また濠や土手、道路の描き方も同様である。（資料⑪は私が部分図を貼り合わせたもの。歴博にある一枚絵図は文字や色調も整っている美品）

忠敬資料の江戸図は、誰かの描いたものを忠敬の地図御用所で写しとった、という見方もできる。次にこの絵図（資料⑫）余白の書きこみ文を記す。

「元書七尺有余四方ニメ江戸絵図ト計有

按ニ此図慶長十二年ヨリ同十五年之間ナラン。其証ハ忠世君御改名雅楽頭以前、右兵衛太夫慶長十二年七月也。河中嶋少将忠輝卿流罪慶長十五年二月也」

一本、村瀬英義といへる人の考にいふ

慶長十二年丁未七月三日酒井雅楽頭青山大藏少輔共に改名あり。既に其当名を記し、同廿七日死去せし石川長門守の姓名を載たり。是を以て考ふれハ慶長十二年七月中旬の頃記せし地図ならんと云々。

図録の解説では『慶長十三年江戸図』としながらも、後年、進歩した作図の技術を応用して、当時の曲輪内の形を再現するために描かれたもの、としている。いずれにしても戦国時代をほうふさせる名だたる諸将が列挙されており、さながら大河ドラマが一枚の絵図に凝縮された感がある。

さて、また謎解きの推理となるが、この江戸図はいったい誰からのものか、どうして忠敬資料の中に在ったのかを、私なりに思考してみた。

この連載の第一回、『長崎之図』に遡る。長崎絵図は、忠敬が近藤重藏から借り受けたものを返さずに所蔵していた、と書いた。

前述した江戸絵図。最初の木版刷り『武州豊嶋郡江戸庄図』の原版は寛永九年（一六三二）のものであるが、図録に掲載されている寛政二年（一七九〇）の重版図はその版上に近藤（重藏）守重の写図との説明がある。（資料⑭）

近藤重藏は、寛政二年に御手先組与力、火付盗賊改方としても勤務し、寛政七年には長崎奉行付、同九年に江戸に帰参し、その後は蝦夷地へ赴き、探險によつて国防上の功績を残し、文化五年（一八〇八）には江戸城紅葉山文庫の書物奉行に就いている。

その頃の忠敬との交流が密だった『江戸日記』ことを思うと、『慶長十三年江戸図』もまた近藤重藏のものの貸し借りではなかったかと

推察することもできる。

話は戻るが、図録の慶長図（資料⑫）の右下隅に押印された「莞斎蔵」。この莞斎を検索してみると、かの『江戸名所図会』の編著者であることが判った。この大作の書は、莞斎の息子の斎藤月岑によつて世に出たが、斎藤幸雄、幸孝（莞斎）、幸成（月岑）三代にわたる大著である。莞斎の没年月は文化十五年（一八一八）三月、忠敬没の一ヶ月前。忠敬との交接は不明だが、書物奉行の近藤重蔵との交流、特に江戸絵図考察上のつきあいはあつて当然と思われる。

一枚の絵図が関ヶ原の戦いから、花開く江戸文化にまで及んでいて、興味が尽きなかった。

（次号につづく）

（かしわぎ たかお・税理士・作詞家）

【柏木家資料】

『江戸城御曲輪内図』 国立歴史民俗博物館所蔵

歴博への寄託者

香取市佐原

柏木俊一

写真撮影

成田市

佐藤 勲

【参考資料】

『古板江戸図集成 第一巻』 中央公論美術出版

『江戸城下武家屋敷名鑑』 原書房

（原本『幕府普請奉行編 御府内沿革図書』

『江戸城下変遷絵図集』 原書房

【次号予告】

・司馬江漢の『地球略説』『地球一覽図』（木版手彩色）

近刊紹介

時代に挑んだ科学者たち

19世紀加賀藩の技術文化



19世紀加賀藩の技術文化

価格 2,625 円

2009年6月発行

19世紀加賀藩「技術文化」

研究会編／北國新聞社刊

(ISBN : 978-4-8330-1697-1)

内容

彗星の観測、砲台の建造、蘭学の最新医術：激動の幕末を駆け抜けた知のネットワークに迫る。

目次

第一部 「技術文化」の背景（十九世紀加賀藩の技術文化

医者と暮らした諸相／江戸時代後期の加賀藩の儒者たち）

第二部 「技術文化」を創った人々（『時規物語』と遠藤高環

の思想／「精密科学」を加賀藩にもたらした人／遠藤高環

とそのグループ／石黒信由以下四代と田辺吉平・遠藤

高環・河野久太郎との交流／河野久太郎のつくった大砲

―伝統兵学と西洋砲術 加賀藩蘭方医藤井方亭とその

子三郎ほか）

「伊能全図―北海道図」の功労者 間宮林蔵とゴロヴニンとの出逢い

河島悦子

寛政四年（一七九二）、北海道根室港に現れたエカテリナ号なるロシア船に、三人の漂流日本人（大黒屋光太夫、磯吉、小市）が乗っていた。伊勢の神昌丸の彼等を送還し、交易を願うラクスマン使節（父キリロ・ラクスマンは高名な博物動植物学者である）に対し幕府は「通商ノ儀ハ長崎ニテ」と信牌（長崎入港証）を渡し追い払った。蘭学者桂川甫周が江戸で光太夫達の聞き書きをまとめたのが『北槎聞略』の書名で今も読み継がれている。

寛政五年（一七九三）暮れ、奥州宮城の若宮丸が難風に遭い八ヶ月間海上を漂った末、アリューシャン列島の小島に漂着。島人や商人の助けを借りてオホーツク、イルクーツク、ヤクーツクと旅を続け、十六名中十名が生き残りロシア皇帝アレクサンドル一世に拝謁、四名が帰国を願い出ペトルブルグを出港した。外国では「第一回クルーゼンシュテルン世界周航記」と呼ばれるが、日本では「文化元年ナジエダ号レザノフ使節長崎訪問」と言われる。この時北海道で渡した信牌を持参したのは言うまでもない。

レザノフと漂流一行は半年余待たされ、上使遠山景晋から次のように告げられた。

「此度ロシア船渡来に及び候儀、以後信義を結び交易の道をも相啓きたき旨段々申し立て候ところ、願いの趣御国法に相背くべく御許容相成り難く候間、皇帝の信書、進物共すみやかに持帰るべく以後決し



間宮林蔵（1780～1844）

常陸国筑波の農家に生まる。1800年20歳のとき箱館で伊能忠敬と出会う。29歳で間宮海峡発見。1811年秋に忠敬に緯度測定法を学び12月に蝦夷地へと向かう。翌1812春に出会った。

て渡来いたすまじき旨、江戸よりお達しこれ有り。但し漂流船には食物・薪・水を与へ保護を加える」

レザノフは無言で去った。漂流津太夫達は文化二年（一八〇五）暮れ、迎えに來た仙台藩士と共に帰国。途中江戸で四十日間、大槻玄沢、志村弘強が聞き取り調査を行い『環海異聞』が成立した。他の学者が聞き取れぬ彼等の言葉を、玄沢のみは簡単に聞き取ったという。十三年間異国語で暮らしてもお国訛りは消えないようだ。

文化六年（一八〇九）間宮林蔵が海峡発見。だがこれは伊能図が秘図であった為、文政九年（一八二六）シーボルトの目に留まる迄誰知ることとはなかった。嘉永元年（一八四八）ロシア人ネヴェルスコイが陸続きと思われていたサハリンの島説を発表、嘉永五年（一八五二）シーボルトが『日本』を発売、マミヤカネヴェルスコイかで世を賑わせたが、現在は現地名を取ってタタール海峡と記されている。

文化四年（一八〇七）林蔵が蝦夷の地を決死の思いで測っていた頃、北海道はかのレザノフの私恨による報復でさんざんに荒らされていた。エトロフ在島中彼らと戦った体験を持つ林蔵にしてみればロシア人に

対しては許し難い個人感情が働いていた。日本領蝦夷地の住民総てがそうであったと察せられる。

そんな状態の文化八年（一八一）ディアナ号の艦長ゴロヴニン¹は海軍大臣より「千島列島南部及びタール沿岸からオホーツクまでの間を最も正確に測量せよ」と命じられた。食料、水不足の為、エトロフ、クナシリの浦々の測量を兼ねながら回り（クロノメーターを使っているの上陸の必要はない）クナシリ島トマリ湾内ホルタルベツ²へ七月一日に艦長以下七名と通詞一名が上陸、南部藩の詰役人と話合った。

日本側の記録では「乗組員百二名（実は五十一名）一艘のみ米二十俵分けて欲しいとの事だが、松前表に問い合わせねばならないので日数三四十日かかる。頭立つ者一人と通詞を残し本艦に戻り湾内で待つよう命ずるも聞き入れず海岸へ駆け出した」秋になれば海が荒れ測量不能になると判っているので、オホーツクへ直行し食糧補給をした方が早いとゴロヴニンは判断したのだった。

実はこの頃日本では度重なる露船の濫妨で、かの国の船に薪水食料は出さず、生捕るか若しくは打ち沈めの令が出されており、南部藩の役人も松前へ応援の報せを出す用意をしたのだが、彼らが逃げたので取り押さえ縄を懸け牢に入れ、露船へ三貫五百目筒砲を打ちかける等したが、彼らは応戦しながら湾外へ逃げ去った。どちらの砲も命中せず被害はゼロだったが、生捕り人達を露船が取り戻しに来れば手薄で困ると西海岸通のペトカ番屋に移すも同所も同様なので、箱館へ送ることになった。

ゴロヴニン『日本幽囚記』曰く、高手小手に縛られ二十八日かけて箱館に着き獄舎に入れられ、翌日通詞の上原熊次郎と医師の東江³が来る。エトロフから来たエスキモーのアレクセイがロシア語からクリ

ール語へ、それを熊次郎が日本語に改め役人に伝える。医師は地理に明るくいろいろな地図を持っていた。それから松前へ移動、毎日奉行所へ通い尋問を受ける。

日本側の資料には「レザノフの手下フヴォストフのリシリ、エトロフの浦々狼藉仕候頃は、商売のコンパニヤ（露米会社）の社員にて日本国村落を襲ひ乱妨仕り候儀は一己の了簡にしてロシア国家の知らざる所に御座候。彼等兩人国王の怒りに触れ刑に処し只今はすでにこの世になく」とある。

十一月松前奉行は少し判ってくれ縄を解き檻屋を改造、格子は外され畳が敷かれ食事も良くなった。「叶うならすぐにも釈放したいが、日本では上様と幕府の許可を得ねばならず幕府に出す書類は二人以上で作成せねばならず、熊次郎ともう一人村上貞助にロシア語を教えて欲しい」貞助は記憶力、理解力も抜群で発音は並はずれに良く、かの光太夫の記述書をテキストに真偽を正していた。

寒い冬を越し春になると江戸から新顔が派遣されて来た。間宮林蔵という測量天文家であった。幕府が蘭方医の勧めに従い壊血病の予防



ゴロヴニン（1776～1831）

ロシアの海軍士官。1811年エトロフ・クナシリ両島を測量中、松前藩に捕えられ。間宮林蔵らの知識人と接触、その見聞を詳細に綴った『日本幽囚記』は欧州で各国語に翻訳され、流布した。

薬だとレモン汁二瓶とミカン数十個、非常に良い香りの干し草を彼にこづけて寄越した。この日本の測量家にわが陸岸測量法や天体測量法を否応なく伝授させる為の鼻薬だと感づいた。(筆者注―伊能図を見せてやりたい)

彼は早速自分の器具類を持って来た。例えばイギリス製の銅の六分儀、コンパス付きの古風な観測儀、作図道具、人工水準用の水銀などで、「この品々の西洋風の使用法を教えて頂きたい」という頼みだった。彼は毎日朝から晩まで詰めきりで、自分の旅行の話や描いてきた各地の要図や風景など我々にとつても極めて珍しいものを見せてくれた。

彼は千島列島第十七島チルボイ(十八島がエトロフ、十九がクナシリ)まで行きその上満州領のアムール河に達し、日本人仲間では大旅行家と認められていた。彼の虚栄心は大したもの、絶えず自分の壮挙やその間に舐めた苦勞を物語り、その証に旅行中に使った鍋を持ってきて我々に御馳走してくれた。米飯で火酒を蒸留する器を持っていていつも傍らの炉にかけていた。水兵たちが大好きで喜んでいた。

彼は六分儀を使い天然水準によつて太陽の高さを測定する術を心得、真南の太陽の高さによつて土地の緯度を発見する方法を知っていたし、太陽の傾斜表とこれに関する修正表を使っていた。オランダ語から日本語に訳したものだそうで、我々は手許に自分の表を持たないので日本の表が十分に正確かどうかは調べられなかったが何か古いオランダの本から抜いたものではないかと思う。

間宮林蔵は極めて珍しい情報を沢山知らせてくれた。前に他の日本人からも聞いていたので信ずるに足ると思う。学者だけでなく卓越した武人として名誉の者であると知った。「日本人は戦にかけては外国に負けない」と我々を威嚇した最初の日本人であり、同僚達にまで嘲笑されていた。(江戸の日本人は我が国の大筒、小筒がいかに貧弱である

かを幕末迄気付かなかつた。九州と蝦夷地は知っていた。)

彼は太陽と月、又は星との距離によつて経度をも探知できると聞いてどうしたらよいか教えてくれと頼むのだが手許には必要なものは何もなく、通詞ときたらどんな簡単な事でも一苦勞しなければ理解できない程語学力がなかつた。だから断ると非常に不機嫌になり「近いうちに江戸から蘭語通詞と学者が派遣され學術關係の事項について説明を求めるのでその時は否応なしに返事をさせますぞ」と言つた。間もなく蘭語通詞馬場佐十郎、学者足立左内がやつて来た。佐十郎は蘭語を完全にマスター、現在フランス語にとりかかつていたのでロシア語も進歩が非常に速かつた。足立左内は何でも知つていて、ただロシア式の説明を学びたいだけであつた。だが数学に関しては通詞達が何一つ理解がなくすべて通訳でできなかった。

ロシア暦の話をする足立は即座に「その暦法も完全ではない、なぜなら一定の周期ごとに二十四時間の差が出ます」すべてがこの調子で、我々ヨーロッパ人が無知で野蛮人ばかりと思ひ込んでゐる日本観がとんでもない見当はずれであると知つた。彼等はフランスの天文学者デ・ラランド(二七三二―一八〇七)の説すら理解している恐るべき人種であり、ただ平和が長く続いた為臆病になつてゐるだけ。(『日本幽囚記』より)と二年三ヶ月間の幽閉中に垣間見た日本を評している。

彼を釈放する為に活躍したのが高田屋嘉兵衛で司馬遼太郎の『菜の花の沖』に詳しく著されている。私が知りたいのは林蔵が北海道をいかに測量したかだが浅学で知らない。

ゴロヴニン氏が帰国した一ヶ月後に始まる督乗丸漂流記で難破後四百八十四日目に英船に救われた船長らは世界各地を回りペトロバウロフスクに着き、ロシア船で出港後エトロフ島とクナシリ島の間で小舟に乗り換え自力でエトロフ目指して行くもウルップ島迄流され上陸。

熊に襲われ鉄砲を撃ち、舟を伏せて砂に潜り命を繋ぎ、霧が深いので磁石を立てて夜十時頃エトロフの北東岸に着く。日本の地だから安心と再び舟を陸に上げ食事の用意をしていると熊ヒグマとかいう牛のような大熊が数えきれぬほど現れ、舟の下へ逃げ込むと舟を引き起こそうとして舟底をガリガリ削るのでまことに恐ろしく鉄砲を暇なく撃つて夜を明かした。東風なので舟は出せず流木を多く拾い集め夜は盛大に篝火を焚き三日過ぎた。風が良くなったので又懸命に漕ぎ、陸に上がって休みたかったが熊が怖いので休まずシビトロ番屋まで漕ぐ。漂流民なので後は付添人も付き民家に泊まれる。間宮氏は幽囚記によれば番屋で働いた俸給を測量費に充てたとあるから人も多くは雇えまい。忠敬師だって私費に近い状態だったが御用旗が有った。恐らくは辛く恐ろしい日々を積み重ねての北海道図であろう。伊能全図を見る度に、他人に説明する度に、これは「間宮・伊能図」なのだと告げることが忘れてはならないと思う。

(かわしま えつこ・歴史街道を歩く会代表)

【参考文献】

- | | | |
|----------------------------|----------------------|-------|
| 『日本幽囚記』 | ゴロヴニン著 井上満訳 | 岩波書店 |
| 『北槎聞略』 | 桂川甫周著 亀井高孝校訂 | 岩波書店 |
| 『環海異聞』 | 大槻玄沢・志村弘強編 池田皓訳 | 雄松堂 |
| 『魯西亜渡来録』 | 野中素校注 諫早郷土史料刊行会 | |
| 『船長日記』 <small>かなざき</small> | 池田寛親自筆本 池田寛親著・村瀬正章訳著 | |
| 『国史大辞典』 | | 成山堂書店 |
| ※【間宮林蔵肖像画】 | 間宮林蔵記念館蔵 | 吉川弘文館 |

【参考】日露関係事件一覧(本文関係)

- 1792 (寛政4) ラクスマン使節の蝦夷地来航
エカテリナ号で大黒屋光太夫らを送還→桂川甫周『北槎聞略』
- 1793 (寛政5) レザノフ使節の長崎訪問→佐賀藩の書簡集『魯西亜渡来録』
ナジエダ号で若宮丸・津太夫らを送還→大槻玄沢『環海異聞』
- 1807 (文化4) レザノフの手下フヴォストフらにより略奪・乱暴などの報復
フヴォストフら処刑、しかし日露関係は大いに緊張→北辺警備
- 1809 (文化6) 間宮林蔵、サハリンが島であることを確認「間宮海峡発見」
- 1811 (文化8) ディアナ号艦長ゴロヴニン拿捕「ゴロヴニン事件」
2年3ヶ月の抑留→ゴロヴニン『日本幽囚記』
- 1812 (文化9) ディアナ号副艦長リコルド来航、ゴロヴニン奪還を図る
ゴロヴニンと歓喜丸・五郎治らの交換を要請→日本側拒絶
(〃) リコルド報復措置としてクナシリで日本船を拿捕
観世丸・高田屋嘉兵衛を抑留→嘉兵衛とリコルド信頼関係築く
- 1813 (文化10) 高田屋嘉兵衛送還、ゴロヴニン解放
嘉兵衛の尽力でゴロヴニン解放→司馬遼太郎『菜の花の沖』
(〃) 督乗丸難破・漂流→池田寛親『船長物語』
- 1853 (嘉永6) プチャーチン長崎に来航 日露和親条約締結へ

伊能忠敬、測量先で

古里の人々と会談

佐久間 達夫

伊能忠敬の十七年間の全国測量には、悲喜交々のできごとがあった。忠敬が最も信頼し、片腕のように思っていた坂部貞兵衛の死、規則を破ったとの理由で内弟子への謹慎や破門の申し渡し、地元の役人との考え方の相違が起因となった上司よりの訓戒など、悲しいことや氣苦勞があった。

反面旅先で朋友や古里佐原の人々との出会いや談笑などもあり、忠敬は、それによつて身体的精神的な悩みや疲勞を少しは癒すことができた。

○ 白河宿で、佐原で酒造をしていた因幡屋宅に止宿

第一次蝦夷地測量の往路、寛政十二年（一八〇〇）閏四月二十三日、奥州街道の白河宿（現福島県白河市）で、予定していた宿が狭小であったので、急遽宿替えをした。宿替えした宿の主人は、因幡屋茂兵衛といつて、かつて下総国佐原村の丸屋伊右衛門という人の酒蔵を借用し、丸屋清吉といい、酒の醸造をしていた人である。

茂兵衛は、その後、大坂に行き、米穀商を営んだが、損金を出し、この白河城下へきて、宿屋を始めたとのことである。

佐原の丸屋伊右衛門宅は、忠敬の佐原宅とは、三百メートル程しか離れておらず、村の中央を東西に走っている香取街道を挟んで南側に忠敬宅が、北側に伊右衛門宅の屋敷があった。当時丸屋伊右衛門は、

酒造のほか、

屋敷 三反七畝一一步 貸地を含む

田地 九反六畝一四歩

（上田 三反四畝一八歩、中田 二反四畝二二歩、

下田 二反九畝三歩、下々田 八畝二歩）

畑地 八畝二二歩

（上畑 二畝、中畑 二畝六歩、

下々畑 四畝一六歩）

流作田 五反四畝二〇歩

の土地を所有し、佐原でも上位に位置する資産家であった。

（「佐原村屋敷田畑字切名寄小前帳」寛政六年）

茂兵衛は、遠来の測量隊の一行を酒肴で接待し、測量御用を労った。忠敬はその謝礼として、茂兵衛の女房に南鐮一片を贈った。南鐮とは、江戸時代の長方形の銀貨幣で、一両の八分の一、すなわち二朱銀である。

宿替えをした家の主人が、佐原の忠敬家の隣接に住んでいたとは、人世は不思議なものである。

資料一 伊能忠敬測量日記 佐久間達夫校訂

原本 伊能忠敬記念館所蔵

・寛政十二年閏四月二十三日付

朝より曇天。朝六ツ半頃出立。三里一町五十四間鍋掛、八町越堀、二里十一町四十二間半芦野宿、三里四町三十五間白坂宿、一里三十三

右國の歴史作
まゐりしうの
一屋敷様
七歩
伊古屋
日人

此口吉老番
元禄十一年
江戸

一屋敷様
七歩
日人

右國の歴史作
まゐりしうの
一屋敷様
七歩
伊古屋
日人

伊能忠敬は、蝦夷地測量の帰路、寛政十二年十月九日、陸奥国岩沼（現宮城県岩沼市）の岩沼大明神を参詣した後、寛政六年に奥州旅行の途次、岩沼の渡辺方で死亡し遺骸を同家の墓地に埋葬してある、佐原村の伊能四郎兵衛慎方のお墓に立ち寄りお参りをした。

伊能慎方の子孫は、現在、佐原の市街を南北に蛇行して流れている小野川にかかっている「忠敬橋」の近くで、食用油商を営んでいる「油屋四郎兵衛家」で、現当主は、二十二代並木茂徳（四郎兵衛家は途中で並木と改姓する）という。

十五代孚充は下総国磯部村（現成田市磯部）の桧垣家から婿養子に入った。また、桧垣家へは、伊能三郎右衛門家の十三代景文の六女・ゑむが嫁いでいる。伊能家では、太平洋戦争中、忠敬の遺書遺品の一部を桧垣家に保管を依頼していた。

なお、佐原町の初代の町長・伊能広則と国学者で和歌の大家であった伊能顥ひのりも四郎兵衛家の人であり、伊能忠敬研究会の会員である小池美幸氏は、四郎兵衛家の子孫である。

```

graph TD
    初代[初代] -.- 慎方[慎方]
    慎方 --> 孚充[孚充]
    孚充 --> 陳寛[陳寛]
    陳寛 --> 広道[広道]
    広道 --> 孝雄[孝雄]
    孝雄 --> 孝雄死亡[孝雄（死亡）]
    孝雄 --> 妻なか[妻なか]
    妻なか --> 美幸[美幸]
    妻なか --> 俊雄[俊雄]
    俊雄 --> 源太郎[源太郎]
    源太郎 --> 茂徳[茂徳]
    茂徳 --> 豊[豊]
    豊 --> 倉吉[倉吉]
    倉吉 --> 広徳[広徳]
    広徳 --> 寛繁[寛繁]
    寛繁 --> 広則[広則]
    広則 --> 進一郎[進一郎]
    進一郎 --> 妻うめ[妻うめ]
    妻うめ --> 茨城県土浦より婿養子[茨城県土浦より婿養子]
    妻うめ --> 妻さく[妻さく]
    妻さく --> 佐原市佐原[佐原市佐原]
    佐原市佐原 --> 並木平左衛門の娘[並木平左衛門の娘]
    並木平左衛門の娘 --> 並木と改姓[並木と改姓]

```


一里之十五

[illegible]

四ノ二

[illegible]

孝子

白文珪

下総国

文化乙丑弥生十八日、本日久保屋
甚四良、寺宿箕輪由兵衛、

大和屋三良兵衛、新左衛門、

小兵衛同行五人、我家々を

門立して、大橋本より船に乗、

また、本橋本両人は浜宿川岸

より一舟に乗合、自々の町々

隣町迄魂（懇）意にし友達、川口

または、荒川の茶店まで、

見立て阿利候。

(中省略)

一、神戸

此宿中頃に而、松や九左衛門と申家に

伊能勘解由先生楚く里やう（測量）御用に

付、御宿札有天、御尋申上候而、得御意

不斜、奉改而、道中御意（威）光奉恐入候。

露払、盛砂也。我等出立よりは、二十日斗り

御先爾故、難得、其得存下所、右之趣中に、

双方共に、大悦、筆紙爾徒くしがたく候。

尤、箱根の今坂に十日余懸り、夫より

荒井へ御ぬけの由、被仰聞候。玉垣村、

此在所は、龍が崎、松の氏の御在所に御座候。
則、松野氏のせつたい茶屋阿り

一、白子（四月十二日 白子や泊り）

（以下省略）

資料六 伊能忠敬測量日記

佐久間達夫校訂

原本 伊能忠敬記念館所蔵

・文化二年四月十二日付

晴天。朝六ツ後四日市宿出立。我等、市野、稻生、門谷、小坂、僕伊兵衛、三治なり。追分にて小休。坂路、東海道測量の続き印に両宮石灯際へ石を埋込。それより神戸宿、又城下迄測る。此所本多説三郎領分にて、即居城なり。神戸町年寄鈴木又兵衛、河合善右衛門出る。同所町奉行手付鈴木太左衛門、町目付小嶋甚太夫出る。神戸城下へ四ツ半頃に着。

代官松原文太夫御用聞に出る。市野、稻生、門谷、小坂仕越測に出る。

八ツ半後、下総佐原、本谷新左衛門、大和屋三郎兵衛、久保屋甚四郎、伊能酒頭司由兵衛、下新町荷持小兵衛五人、止宿へ立寄。是は伊勢参宮より大和路一覽するよしなり。神戸城は往来より右にあり。本道より五町程大手へ近道三四町也。仕越測量は神戸宿より白子宿迄也。是は当宿明十三日、妙法院宮御通行ゆえ、人馬の難渋を厭いし也。白子宿まで測量の間、白子宿入口、小笠原眠之助知行也。家士清水清兵衛、石川千勝、家士鈴江四郎兵衛門岸岡村へ出て、同所大庄屋豊田磯右衛門、有馬備後守家来棚瀬伝兵衛見舞に出るよし。白子宿止宿。松屋九左衛門。此夜晴天測量。

○ 旧米沢街道で、湯殿山参詣の人々と会う。

伊能忠敬は、享和二年七月三日（第三次測量）付の測量日記に、大塩宿と桧原宿（現福島県北塩原村）の山道（旧米沢街道）で、佐原村から来た湯殿山参詣者とあい、書簡を依頼した、と記述してある。

湯殿山（一五〇〇m）は月山（一九八〇m）、羽黒山（四一九m）とともに出羽三山として、古くから山岳信仰の山、山伏修験の地として知られている。特に湯殿山の御神体は熱湯の湧出する巨岩で、社殿はとくにないとのことである。佐原から湯殿山までの距離はどれくらいあるだろうか。信仰とはいえ当時の人々の体力と精神力が感じられる。伊能測量隊の大塩宿・桧原宿の測量については、松宮輝明氏が、伊能忠敬研究会会誌の第五二号・五三号に『伊能忠敬と米沢街道』というタイトルで詳細に記している。

資料七 伊能忠敬測量日記

佐久間達夫校訂

原本 伊能忠敬記念館所蔵

・享和二年七月三日付

朝霧深し。五ツ前大塩出立。一里四町二〇間桧原宿境に至る。それより一里四町四十間、合二里九町桧原宿（会津領）四ツ半後に着。此日両駅の間山道に而、佐原より湯殿山参詣の者に出逢う。佐原へ書簡を遣す。測量者は九ツ後に着。服部善内、止宿へ見廻に来る。両宿の間山中に而、峠谷合、又、大塩川流に添い、左右共高山おとし。此村は溪間に而田畑なし。若松城下へ梶其他挽物の下地をなして家業とす。一同家作よし。泊屋も余程あり。止宿問屋喜兵衛。

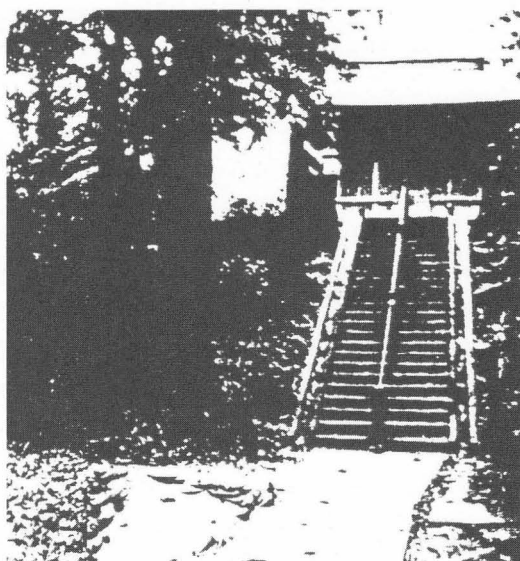
伊能三郎右衛門家七代昌雄の妻・はんの出生の家である伊能権之丞家の六代権之丞美之（江戸の山川吉兵衛の子、文政十一年五月七日没）は、文化六年の春より信濃国岩村田宿（現長野県佐久市岩村田）に逗留して、絵をかいていた。

佐原の富商は、隠居すると好きな学問や趣味に進むという習慣があった。美之は、絵をかって隠居後の楽しみにしていたのである。

文化六年九月十九日、第七次九州一回目測量の往路、中山道を測量して行った伊能忠敬は、岩村田で権之丞美之と会い、久し振りに歓談し、翌朝別れている。

○岩村田宿で、

伊能権之丞と歓談。



浅間神社 富士佐原講社
(香取市佐原仁井宿)

資料八

伊能忠敬測量日記

佐久間達夫校訂

原本 伊能忠敬記念館所蔵

・文化六年九月十九日付

朝より晴天。先手六ツ前、後手六ツ後、追分宿出立。後手我等、青木、永井、上田、長蔵、同所より初め、前田原村枝郷荒町、人家三十二軒。但し小田井宿へ入会を過ぎ小田井宿迄測る。追分より一里十二町、実測一里十五町四十九間。中食本陣内藤叔之丞領安川長右衛門。先手坂部、下河辺、梁田、箱田、平助、小田井宿より初め、岩村田（内藤叔之丞在所 高一万五千石）駅まで測る。小田井より当駅まで人家なし。小田井より一里七町、実測一里三町二十五間三尺。先手九ツ前、後手九ツ後に着。本陣石橋屋八之助、脇宿亀屋元右衛門。此夜晴天測量。当所郡代利根川茂七測器一見を願う。

伊能権之丞、当春より此所に逗留して画を行という。午後より逢談。翌朝別る。

伊能忠敬が壮年時代に佐原を出立し、江戸へ登るときに詠んだ歌に、

眺むれば はや故郷の 山々も

雲隠れして 見えずなりけり

という一首がある。この歌のように、人はいずこの地に住んでいても、古里の自然や人々が懐かしいものである。長い間異郷の地で、測量業務に励んでいた伊能忠敬にとって、旅先での知人や古里の人々との出会いや歓談は、何よりの楽しみであり、体と心の糧になったのである。

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）

名著『伊能忠敬』——その時代と人脈（一）

前田 幸子

はじめに

前号で橋本万平「大谷亮吉と『伊能忠敬』」が紹介された。この記事は渡辺名誉代表から「大谷亮吉に関して書かれたものは少ないから、これを会報に載せてはどうか」と寄せられたものであった。

「存じのように大谷亮吉著『伊能忠敬』は大正六年に帝国学士院から国家的事業として出版された伊能忠敬の伝記であり、「日本の科学者個人の伝記として、これ以上のものは見られない程精確、浩瀚、然も程度の高い専門的な書物」（橋本）と評される大著である。

しかし、この本が伊能忠敬研究の基本書として、また多くの普及書の種本として確固たる地位を占めているにもかかわらず、著者である大谷亮吉については情報も少なく、その功績についても検討が不十分だと思われる。私は日頃から『伊能忠敬』は忠敬研究のバイブルであり、大谷亮吉の情熱の結実だと思っていたので、今回この橋本論文を読み、「関係者はすでに逝き記録は失われたとはいえ、『伊能忠敬』の本は今に残り、日本科学史の一つの金字塔として、不朽の価値をいつまでも輝かしているのである。」という結びの言葉に大いに賛同した。そして大谷亮吉の事跡を辿っているうち、幸運にも亮吉のご子孫の姫路のお宅を訪ねて直接お話を伺うという機会に恵まれたのである。

大谷家の庭には今も秤座時代の石の分銅が積み重ねてあった。大谷亮吉が『伊能忠敬』の調査に着手したのは一九〇八（明治四一）年のことであるから、それから一〇〇年の年月が経過しているのだが、大谷家でお話を伺って、私が最も知りたいと思っていた大谷亮吉の『

『伊能忠敬』刊行までの顕彰関係事蹟

- 一八一四（文化十二） 葛西昌丕唐丹に「測量之碑」建立（忠敬六九歳）
- 一八一八（文政元年） 忠敬没
- 一八二一（文政四年） 「大日本沿海輿地全図」上呈
- 一八二三（文政六年） 忠敬墓碑銘（佐藤一斎）
- 一八六八（明治元年） 明治維新（没後五〇年）
- 一八八二（明治十五） 佐野常民が東京地学協会で講演。贈位・碑提案
- 「故伊能先生事蹟」佐野常民
- 一八八三（明治十六） 正四位贈位
- 一八八六（明治十九） 「小学読本」掲載、以後二〇種以上刊行
- 一八八七（明治二〇） 「修身」掲載、以後四〇種以上刊行
- 一八八八（明治二一） 『伊能忠敬先生贈位始末記』大須賀庸之助
- 一八八九（明治二二） 芝公園遺功表建立（没後七〇年）
- 一八九九（明治三二） 幸田露伴 少年向け読本『伊能忠敬』
- 一九〇四（明治三七） 国定教科書「修身」昭和二〇年まで掲載
- 一九〇六（明治三九） 『伊能忠敬先生事蹟』加瀬宗太郎
- 一九一一（明治四四） 『伊能忠敬 付・測量日記』伊能登
- 『伊能忠敬先生』朝野利兵衛
- 『偉人伊能忠敬』加瀬宗太郎
- 一九一三（大正二年） 『伊能忠敬言行録』西脇玉峰
- 一九一七（大正六年） 『伊能忠敬』刊行・百年忌（没後一〇〇年）

『伊能忠敬』執筆への情熱」の源泉が石の分銅の間に、今も潜んでいるような気がしたのである。詳細については後段の「大谷亮吉」の項で述べることにして、ここでは私の訪問を快く受け入れ、貴重なご教示を下された大谷氏に厚く感謝申し上げる次第である。

一、忠敬顕彰の四段階

さて『伊能忠敬』の刊行は忠敬の没後百年を期して行われたのであるが、明治維新が没後五十年にあたるから、その後の明治・大正の五十年間で忠敬はおおいに顕彰されたといつてよい。顕彰は次の四つの段階にわたってなされた。

① 贈位の申請（正四位追贈）

② 「贈正四位伊能忠敬先生遺功表」の建立

③ 教科書等への登載

④ 大谷亮吉著『伊能忠敬』の刊行

これら忠敬の顕彰に携わった人々について調べていくうちに、ある共通項に気がついた。それらの人々は、「外国留学」の経験をもつ「理科系」の「指導層」である者が多い、ということである。このことから、伊能忠敬は外国にも誇れる成果を残した数少ない日本人として、これから欧米諸国にもひけを取らない近代国家に作りあげていこうとする明治国家の指導者たちに非常に評価が高かったと推論できる。

伊能忠敬が明治以降、どのように顕彰されていったのか、まずは『伊能忠敬』に先行する顕彰実績を、人物史の形でとらえ直してみたい。

二、贈位運動をめぐる人々

佐野常民―忠敬の贈位運動を推進した元老院議長

伊能忠敬の名が広く世に知られるようになったのは、忠敬への贈位がきっかけであるといわれている。この贈位の申請と遺功表の建立を強力に推進し、見事に実現させたのが佐野常民である。この運動の成功がそれ以後の忠敬観に大きな影響を及ぼしたと考えられるので、忠敬顕彰史において重要な人物である。その人間像および贈位運動にかかわるようになった経緯はどのようなものであったのだろうか。

佐野常民（一八二二―一九〇二）は佐賀藩士下村三郎左衛門の子として現在の佐賀市川副町早津江に生まれた。九歳の時、藩医佐野常徴の養子となる。緒方洪庵の適塾に学び、さらに華岡青洲、伊東玄朴に医学を学ぶ。勝海舟らとともに長崎海軍伝習所の第一期生になり日本海軍の基礎作りに携わった。のち佐賀藩を率いて参加した一八六七（慶応三）年のパリ万博でスイス人アンリ・デュナンが発案した赤十字と出会って大いに影響を受け、一八七七（明治一〇）年の西南戦争時に敵味方の区別なく救護を行う博愛の精神のもと「博愛社」を設立。一〇年後、日本赤十字社と改称して初代社長に就任し、「日本赤十字社の父」と呼ばれる。一八七三（明治六）年のウィーン万博には事務副総裁として派遣され、伊能図を出版するなどして活躍。伯爵、元老院議長、枢密院顧問官、勲一等旭日桐花大授章。墓所は青山墓地。出身地佐賀には佐野常民記念館がある。ちなみに記念館のホームページには伊能忠敬への贈位については特に記されていないようである。



なぜ佐野常民が伊能忠敬の顕彰運動を行うようになったのか。その事情を佐野が明治十五年九月に東京地学協会で行った「伊能忠敬の故伊能忠敬翁事蹟」と題する講演から見てみると、そもそものは長崎海軍伝習所時代に遡る。伝習所で訓練を受けていた佐野は伊能図を一見する機会を得てその精密さに驚き、「因って百万懇請して」それを借り、佐賀藩の図手七、八名に謄写させた。そのうち航海に出た際に、その図をもとに航路を定めたが、島の形状や岩礁の位置などが確實精詳なので、まさに「闇夜ニ灯火ヲ得タル」思いをしたという。そして「深ク翁ガ図ノ精ナルニ敬服シ、其功ノ大ナルニ驚嘆セリ」と当時の思い出を述べるとともに、多くの航海者が広くその恩恵を受けたと感謝している。ついで佐野はこの講演の中で英国による日本沿海測量が伊能図を与えたことによって測量が中止されたという事蹟を述べ、このことは「独り翁ノ名譽ナルノミナラス、又以テ我日本ノ名譽ト称スヘキナリ」と日本文明の誇るべき証左となっていることを語り、さらに壙国博覧会（ウィーン万博）に伊能図を出展して各国の称賛を得たことも紹介している。

このような体験をもつ佐野常民がそれから二十数年後の明治十三年一〇月二九日、大蔵卿に就任して千葉県下を種畜場見分のため巡検した。さらに同年十二月に伊能一族の家に宿泊し、たまたま病を得て数日滞在することとなった。なぜ伊能家に泊まることになったのかは詳らかではないが、その時に伊能節軒と大須賀庸之助に会って忠敬の事蹟についていろいろ聴取したと、同演説の中で述べている。

その後の心の動きは以下のとおりである。大須賀と節軒から翁の逸事を聴いて、翁の「功労を追思して感に堪えず」、そして「いまや勤皇の士および學術に功あるものは贈位恩賜あるの盛世なり。」であるから

翁ほどの偉人は、「太政官に具申して贈位恩賜を請い、なおかつ本会において有志者を募り、翁が像を鑄、もしくは碑を建て、その功烈を不朽に伝えて、以て尊崇の意を表せんこと、これ余の最も希望するところなり。」と決意するに至ったということである。

この東京地学協会での講演でおこなった贈位の申請と碑の建立の提案が見事結実し、明治十六年（一八八三）二月二十七日、忠敬に正四位が追贈された。のちに教科書に掲載されることになる伊能忠敬の略伝は、このときの佐野の講演に基づいて書かれたものという。

ちなみに佐野の講演中に「高山正之、蒲生君平、林子平、佐藤信淵ノ如キ、皆贈位ノ典アリ。」との文言が見える。当時、尊皇・維新に功績があつた者に追贈がさかに行われていたようである。当時において正四位が贈られたということがどれほどの意味をもつのか、現代の我々には理解が難しいが、贈位された例を参考までに次に示す。

贈正一位 楠正成 新田義貞 岩倉具視 和氣清麻呂

贈従一位 木戸孝允 大久保利通 北条時宗

贈正二位 森有礼

贈従二位 楠木正行 紀貫之

贈正三位 西郷隆盛 松平定信

贈従三位 賀茂真淵 本居宣長 加藤清正 太安麻侶

贈正四位 **伊能忠敬** 坂本竜馬 高杉晋作 高野長英 杉田玄白

高山正之（彦九郎） 蒲生君平

贈従四位 二宮尊徳 緒方洪庵

なお間重富の墓には「贈従五位間五郎兵衛一門墓所」とあり、従五位が追贈されたようである。

大須賀庸之助―忠敬の贈位に奔走した香取郡長

佐野常民は明治十三年十二月、伊能一族の家で病を得て数日滞在した際に、大須賀庸之助と伊能節軒から忠敬翁の事績について聴取した。そして後日にわたって、両者から文書や資料等の提供をうけ、それに基づいて二年後の明治十五年九月に東京地学協会で忠敬の贈位と碑の建立について演説するに至ったというのが事実経過のようである。

大須賀庸之助（一八五〇―一九〇六）は現在の香取市佐原磯山の生まれ。磯山村の戸長や千葉県の要職を歴任し、明治十四年に香取郡長に就任。利根川の治水対策などで地元のために尽力し、のち衆議員議員となった。郡長への就任が明治十四年であるとすれば、佐野常民が千葉を訪れたときにはまだ郡長ではなかったことになるが、ともかく大須賀は伊能忠敬の贈位にあたり、佐野常民のために忠敬の墓碑銘の拓本や佐原の清宮秀堅、大川通久が書いた伝記などの関係書類を蒐集し、佐野に提供。以後佐野の東京での贈位運動に合わせて、贈位申請書を千葉県令に提出するなどして、力を尽くした。すなわち佐野による東京地学協会からの上奏文と、大須賀による地元からの申請書がほぼ時期を同じくして提出されるよう仕組んだのである。その結果、彼の努力は大きく実を結んだ。伊能忠敬への贈位が見事実現したのみならず、彼が書いた忠敬の伝記は平易な記述で、後世の忠敬像の形成に大きな影響を与えたといわれているからである。



伊能節軒―佐野常民に忠敬の事績を伝えた茂左衛門家の当主

大須賀庸之助とともに佐野常民の贈位運動に協力した伊能節軒は、伊能七家のうちの茂左衛門家の一〇代目当主である。節軒は号で本名は伊能茂左衛門景晴（不明―一八八六）という。茂左衛門家は国学者楫取魚彦が出た家で、魚彦は茂左衛門家の七代目当主・伊能茂左衛門景良である。節軒は一族を取り仕切って七家の合議制で助け合いをしたり、資金をプールしておくなどのシステムを作り、茂左衛門家の中興の祖と言われている。（伊能研第二回例会・伊能陽子氏の講演）

節軒は大須賀とともに佐野常民に伊能忠敬に関する資料を提供したが、大須賀が文書記録を中心に提供したのに対し、伊能家に伝わる書画や手簡、家に伝わる口碑等を伝えたと考えられる。その口碑は、「測量出立の朝、草鞋が切れた話」をはじめとする修身の教科書の種になった逸事である。佐野の演説によれば、節軒は佐野にいくつかの逸事を提供したが、「この他、逸事なお多く、枚挙に遑あらず」としており、忠敬にまつわる逸事がたくさんあったことを伝えている。それらの逸事のすべてが記録として残されなかったことは残念であるが、それでも今日までいくつかの印象的な話が伝わっているのは、節軒の功績であるといえよう。

ちなみに、一八八一（明治一四）年六月三日、次項に述べる渡辺洪基が佐原の伊能節軒を訪ねた記録がある。渡辺は東京地学協会の設立者であり、芝公園の「測地遺功表」設立を推進した人物であるが、当時新聞記者をしていた二五歳の原敬を伴って（渡辺は原敬の仲人であった）北海道・東北・関東を旅行した。その記録が原敬『海内周遊日記』に残されている。その記述によれば、「是より佐原に赴く、亦繁栄の一驛なり。渡邊君に従って伊能節軒君を訪ふ。君は日本地図を創製

せる伊能勘解由先生の遺族ならんと信ずればなり。而して図らざりき君は其同族なれど遺族にはあらず。因て直ちに辞して遺族を問はんとしたるも現今不在なるとの事なれば、前路遙遠此日將に暮れんとするを以て訪ふを得ずして走り小舟を買ふて鹿島に赴く。つまり渡辺と原敬は佐原に行った際、伊能節軒を伊能忠敬の遺族だと思って訪ねていったが、実は忠敬の同族ではあるが遺族でないことを知って直ちに退去した。直系の遺族はたまたま不在だったので結局会えずじまいになったという話である。佐野常民の伊能家訪問より数ヶ月前のこの時点で渡辺が節軒の存在を知っていたのは興味深い。節軒が伊能忠敬の「子孫」として知られていたらしいこと、また彼が伊能一族の代表として訪問者の窓口となっていたらしい様子をうかがうことができるエピソードと解することができよう。

測地遺功表―東京名所となったオベリスク

贈位を記念して、贈位から六年後の一八八九（明治二二）年、芝公園の円山に「贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表」（一九四四年九月二三日撤去）が建立された。設立に際して東京地学協会が資金の募集を行い、合計四、三九二円という多額の寄付が集まったという。

芝公園の小高い丘（古墳）上にそびえる堂々としたオベリスク型の銅標は、当時の人々にとって大きなインパクトを与えたであろうことは想像に難くない。正面には日本を中心とする地図を織り込み、周囲を鉄柵で囲い、当時としては斬新なデザインだったという。今、残されている写真を見ても、この遺功表は気品に溢れた立派なものに見えるが、それもそのはず、この銅標の設計者は東京駅を始め数々の名建築を残した辰野金吾であり、揮毫は「明治の三筆」と称される書家の

巖谷一六（巖谷小波の父）と日下部鳴鶴、撰文は漢学者・川田斐江（歌人・川田順の父、ちなみに歌手・佐良直美の曾祖父）という当代一流の豪華な顔ぶれである。残念ながら太平洋戦争中の金属回収策で撤去されてしまい、昭和四〇年になって元の土台の上に現在の新遺功表が建てられたことは周知のとおりである。

なお『伊能忠敬の科学的業績』の著者、保柳睦美は芝公園の近くで育ち、毎日のように旧遺功表前の広場で遊んでいたそうである。それだけ旧遺功表にはなつかしい記憶が残っているが、「小学校修身の教科書で伊能忠敬はこのように偉い人であったと教えられても、忠敬のえらさが具体的には少しもわからなかった。せめてこの伊能図が、現代日本のために重要な役割を果たしたことだけでも附加されていれば、印象はちがったかもしれない」と述懐している。

つづく

（まえだ こうこ・地方公務員）

【参考資料】

『伊能忠敬』大谷亮吉著・長岡半太郎監修

岩波書店

『伊能忠敬の科学的業績』保柳睦美

古今書院

『伊能図に学ぶ』西川治「伊能忠敬の顕彰史再考」

朝倉書店

『広報さわら』二〇〇三年十一月五日号

佐原市

『東京地学協会報告』

東京地学協会

※画像資料

佐野常民 『幕末・明治・大正 回顧八十年史』所収

大須賀庸之助 大須賀三郎氏提供



お便りから

総会出欠状より

■井上辰男さん(福岡県朝倉郡)完全復元伊能図
全国巡回フロア展の成功を願っています。

■今崎仙也さん(呉市)『御手洗之測量絵巻』旧
柴崎住宅の蔵に一般公開しました。好評です。

■植田浩一さん(大田区)足・腰不自由。

■大内惣之丞さん(習志野市)第八回佐原から江
戸へ110キロ忠敬江戸入り4デーウォーク
のため参加で欠席いたしますが、今後共よろ
しくお願い申し上げます。

■岡部孝子さん(足立区)悲しいかな!今年も欠
席です。老親の介護と孫の誕生で日々忙しく
過しています。

■岡山宣孝さん(杉並区)今春、早稲田大・大学
院(文学研究科)を修了しました。元気です。

■垣見壮一さん(新潟市)障がい者作業所ボラン
ティアで頑張っています。ご盛会を祈ります。

■河西浩さん(甲府市)新沢さんの活躍が大変た
のめしく感じられます。いづれ協力できる時
に精一杯ご協力いたします。

■片寄啓さん(富士市)ごぶさたしております。
当地でまだ仕事が続いておりますので、欠席
が続いております。皆様のご活躍を遠くから
見守っております。

■加藤巷児さん(狭山市)四月一日深川スポー
ツセンターで伊能図フロア展に参加いたしま
した。あれだけの大規模のフロア展ははじめ
てでした。渡辺さんが米国で伊能図二〇七枚

を発見した前後に伊能研にお手伝いに行っ
てそのニュースを一番早くお聞きした時の
ことを思い出しました。

■河崎倫代さん(金沢市)能登半島最先端部の岬
祿剛崎に「伊能忠敬第四次測量 平山郡蔵隊
手分測量の地」の記念碑を建てたいと思っ
ています。今年はちよつと無理ですが、201
0年9月を目標に頑張ります!!

■廣兼信介さん(益田市)昨年度に母を、今年初
夏に父を亡くし両親の初盆をむかえます。動
くことが困難で申し訳なく思っています。

■松尾昌英さん(木更津市)H21・2・4に表記
の場所に移転しましたが、今年94才の年齢と
なり、長距離の外出は禁止されております。
甚だ残念ですが欠席させていただきます。



会員情報

入会 石井友夫さん(横浜市) 洪川家子孫、他。

入会 加藤順三さん(相模原市) 先史地理学他。

退会 金本勝三郎さん(練馬区) 腰が悪く歩行困
難の為退会させて頂きます。色々ありがとうご
ざいました。

退会 神戸信和さん(中野区) 長年にわたり研
究会員として種々御世話になり、ご指導いた
さましたが、2008年度を以て退会させてい
ただき度く、宜しくお願い致します。今後共、
貴研究会のご発展を祈ります。



日々の話題

■新聞記事『日本経済新聞』七月二十九日

「2000年企業63―成長と持続の条件」―測量
の父の伝統残ったに伊能忠敬が登場しました。

【一部紹介】日本地図を始めて実測で作り上げ
た伊能忠敬。その「測量の父」と、千葉県北東
部・佐原の東薫酒造(香取市)は縁がある。伊
能忠敬は五〇歳を過ぎてから全国を測量に歩き、
それ以前は佐原で酒造業を営んでいた。江戸に
も店を出して販売を伸ばし、経営手腕はなかな
かだったらしい。衰退しつつあった家業を再興
したという。東薫酒造の創業者は伊能忠敬に弟
子入りして酒造業を發展させたと伝わる。東薫
は一八二五(文政八)年の創業で、忠敬はすで
に他界していたが、彼がのこした酒造りや酒蔵
経営のノウハウを受け継いだ。(中略)伊能忠敬
記念館によると忠敬は酒造家だったとき、奉公
人を常時二〇人以上、酒造りの時期は五〇人以
上抱えていた。人の使い方でも腕を上げたとい
う。新生・東薫の経営も伝統を受け継いでいる
ようだ。(編集委員 水野裕司)

■新聞記事『産経新聞』八月十九日「元氣の
る歴史人物講座」に「伊能忠敬『日本の姿』に
心血注ぐ」が掲載されました。

【一部紹介】(前略)忠敬の作り上げた「大日本
沿海輿地全図」は極めて精密で、今日使われて

いる日本地図とほとんど誤差はない。忠敬の心血を注いだ努力により日本列島の美しい姿がたち初めて明らかになったのである。この快挙をもたらしたものは、忠敬の並はずれた知的好奇心と熱意と根気である。そしてもう一つ老齡の忠敬を駆り立てたのは北方の危機であった。(後略) (日本政策研究^{セン}主任研究員 岡田幹彦)

■広報紙UR都市機構(旧住都公団)『らうんじ』
「八丁堀から大川端そして文人の足跡を訪ねて」に忠敬さんが登場しました。

上・亀島橋畔の写楽・忠
敬案内板と芭蕉句碑
下・忠敬さんのイラスト



■出版 河崎倫代さん他著『時代に挑んだ科学者たち』が刊行されました。
19世紀加賀藩「技術文化」研究会著北國新聞社刊(詳細55頁)



お知らせ

■完全復元伊能大図巡回フロア展

◇さいたま市 与野体育館 埼玉新聞等主催
2009年11月5日(木)～8日(日)

◇松江市(検討中) 松江市総合体育館
2010年6月24日～27日(案)

◇伊予市(検討中) しおさい公園市民体育館
2010年8月5日～8日(案)

◇京都市・宇都宮市(企画中) 期間・場所未定

■早稲田大学會津八一記念博物館

◇「古地図で眺める朝鮮半島」(詳細37頁参照)
2009年11月24日(火)～12月19日(土)

◇「旧富岡美術館の近代画」【前半】
2009年11月28日(土)～12月22日(火)

◇日本測量協会 ☎03・5684・3360(甘楽)
2009年10月23日(金) 15時(有料要申込)

◇「間宮海峡発見二〇〇年記念 伊能大図フロア展 in わっかない」 稚内総合文化センター
2009年10月9日(金)～12日(祝)

◇「士別市開拓一〇〇年記念事業『伊能忠敬大図2009フロア展 in しべつ』」生涯学習情報セン
2009年10月30日(金)～11月3日(祝)

◇「地図センター」 ☎03・3485・8121

■伊能忠敬記念館

☎0478・54・1118

◇追加指定記念特別展(追加資料の展示)
「重要文化財伊能忠敬関係資料」展

期間 9月15日(火)～11月15日(日)

展示品 伊能図(宮崎・熊本部分・中国)
下図(静岡部分)、現地提供絵図

忠誨の星座図と伊能家屋敷図 他

◇第64回収蔵品展

期間 11月25日(水)～1月24日(日)

展示品 伊能大図(愛知・滋賀県付近) 他

◇「地図展2009 in 北九州」 10時～18時
2009年10月29日(木) 11月1日(日)

小倉井筒屋パステルホール 新館9階ホール

◇「デジタルマップフェア2009」
2009年10月2日(金) 3日(土)

東京国際フォーラム展示ホール2

■佐原の大祭「2009秋祭り」※雨天決行
10月9日(金)・10日(土)・11日(日)



2008「佐原大祭」ポスター

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回

《会報》—原稿締切と発行予定—
第58号締切9月末 発行11月
第59号締切12月末 発行2月
第60号締切3月末 発行5月
第61号締切6月末 発行8月

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務局が新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

（07年8月よりアドレスが変わりました）

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にて一任下さい。手書き、CD、メール添付可。（FD要相談）一頁は二段組31字×26行（40字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしております。

伊能忠敬研究会のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadaka.org/>（休止中）

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田）

<http://www.ttrim.or.jp/~koko>

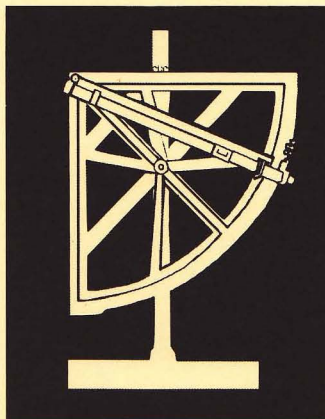
編集後記

◇今年は大宰治をはじめ松本清張、中島敦、大岡昇平、埴谷雄高など、著名な作家たちの生誕一〇〇周年にあたる。大宰治と松本清張が同年生まれというのは意外だが、清張に『老十九年の推歩』という伊能忠敬を描いた作品があるのを知り、読んでみた。◇小説というより評伝であるが、忠敬の幼い頃は「親類や知り合いの家を転々と流寓する」「浮浪児」であったとし、自分の境遇を重ねて「身につまされる」と共感を寄せている。◇佐原の繁栄をオランダのユトレヒトに、測量隊の内紛を某大学の遺跡発掘隊の事例に比したりして部分的には面白い。◇その中で全く同感だったのが四番目の妻・お栄さんのこと。清張氏はお栄さんについて読んだとき、森鷗外最初の妻・赤松登志子が脳裏に浮かんだ、という。実は私も同じであった。◇赤松登志子の場合には理由はいろいろ言われているが、要するに離別された。お栄さんは自ら家を出たようだが、「四書五経の白文を苦もなく読候」という二人。正反対の境遇の奥に、何か共通するものを感じる。（M）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.57 2009



TOPICS I

- Historic Spots about Inoh Tadataka (7)
- Mandala and Stone Monument of Inoh Family
- General Meeting Report in Fiscal Year 2009
- Two Map Exhibitions in Yokohama and Shinjuku

- Tanigaki Tadatashi 1
- Editorial Department 2
- Editorial Department 4
- Editorial Department 10

TOPICS II

- Lecture "Edo Civilization and Inoh Survey"
- "*Tokaido Road Map from Kanagawa to Odawara*"
- Our old House where Inoh Survey Team Stayed
- Place Names and Landscapes in "*Inoh Daizu Soran*" (11)
- How to Enjoy Inoh Maps
- An Episode about Drawing of Horyu-ji Temple
- A Traditional Folk Drama "Kiraigou"

- Hoshino Yoshihisa 8
- Onuma Akira 11
- Tanigaki Tadatashi 12
- Hoshino Yoshihisa 13
- Onuma Akira 22
- Kashiwagi Takao 29
- Eguchi Toshiko 48
- Inoh Yoko 30

FROM VISITORS' REGESTERS

ARTICLES

- Tadataka Measured Azimuth and Latitude while Traveling
- Study of Inoh Tadataka (7)
- Kashiwagi Family Documents (3)
- Encounter of Mamiya Rinzo and Golovnin
- Tadataka Talked with People in Hometown while Traveling
- A Great Book "Inoh Tadataka"

- Sakuma Tatsuo 32
- Ishiya Haruka 38
- Kashiwagi Takao 49
- Kawashima Etsuko 56
- Sakuma Tatsuo 60
- Maeda Koko 66

MEETING ROOM

- Letters from Members Daily Topics and Informations

- Editorial Department 71

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY